

スコットランド王国の周辺国のノーザンブリア
—— ノーザンブリア王国の成立から凋落・消滅までの変遷 ——
Scotland and Its Neighbouring Northumbria
—— The Rise to Fall of Northumbria Kingdom ——

久保田 義 弘

要 旨

本稿（スコットランド王国の周辺国のノーザンブリア）では、5世紀から11世後半までのノーザンブリア¹王国の変遷を次の5点で記述する。第1に、ローマ帝国の撤退した5世紀初め、ノーザンブリアでは、その北のベルニシアにはブリトン人（ゴドウィン人）、その南には別のブリトン人が居住していた。5世紀後半から6世紀にかけて、そこにアングル人が侵入し、ブリトン人の土地を奪い、彼らはベルニシア王国とデイラ王国を形成した。第2に、7世紀にはデイラ王国のアシルフリス王の下でベルニシア王国とデイラ王国が統合されノーザンブリア王国（首都はヨーク）が形成された。エドウィン王やオズワルド王の下でその領土は拡張されたが、マーシャ王国のベンダ王やアシルレッド王あるいはピクト王国と衝突した。第3に、オズウィ王の病没後、685年のDunnichenの戦いでエクフリス王はピクト王ブリュイディ3世に敗北し、その王国の勢力に影が差した。

8世紀の初めに、エクフリス王の後継者アルズフリス王は、その統治領土を減少させたが、ノーザンブリアの分裂を阻止し、ノーザンブリア王国にその文化の黄金時期をもたらした。その後、その王国の統治力は凋落し、その世紀末にはその王国は無政府状態に陥った。第4に、その世紀の後半から散発的にイングランドやアイルランドの修道院や教会を襲撃し、貢ぎ物を求めたヴァイキングは、9世紀半ば過ぎには、継続的にその王国を攻撃し、居住し、独自の独立国を建てた。ノーザンブリア王国を侵攻したヴァイキング（その指導者は、アルフダンやイヴァールやウバであった）のイヴァール王家による独立国が建国された。その世紀末には、東アングリア王国やノーザンブリア王国を略奪し、アイルランドにはダブリン王

¹ ノーザンブリアは、現在、スコットランドのロージアンとボーダーズならびにイングランドのノーザンバーランド、ドラム、北ヨークシャー、タインアンドウェア、西ヨークシャー、および東ライディングの地域に対応する。

国を建て、また、ノーザンブリアの南（デイラ王国）に自身の独立王国であるヨーク王国を建てた。その首都がヨークであった。ノーザンブリアの北（ベルニシア王国）は、バンバルグの州知事によって治められた。第5に、ヴァイキングのヨーク王国は、9世紀の後半には、その南下政策によって、彼らはウェセックス王国と衝突した。937年にウェセックス王国のアシルスタン王をイングランドの大君主にした、イングランド王国の統合が形作られた。954年にエリック・ブローダックがノーザンブリアから追放された。これ以降、ノーザンブリアは独立国ではなくなった。ウェセックスの州知事（宮廷貴族）が任命され、それによるノーザンブリアの統治は、クヌート大王の時代およびウィリアム征服王のイングランドでも継続された。（キーワード：ゴドウィン王国、デグサスタンの戦い、ノーザンブリア王国、ベルニシア王国、デイラ王国、アシルフリス王、エドウィン王、オズワルド王、オズウィ王、ダンニヘンの戦い、イヴァール王家、ヨーク王国）

第1節 ベルニシア王国とデイラ王国の統合：ノーザンブリア王国

1.1 ゴドウィン王国とアングル人のベルニシア王国の建国

現在のスコットランドの南東部（中央ロージアン、東ロージアン、ベニクシャー、ロックスバラ、エトリック、ローダーディル）²ならびにイングランド北東部のノーザンバーランドやダラムは、ローマ人の支配時代には Votadini と呼ばれた。ローマ人のブリテンからの撤退後には、そこにはゴドウィン人(Gododdin)と呼ばれたブリトン人が居住した。また、スコットランドのクラックマナンシャー(Clackmannanshire)辺りに住んでいたブリトン人は、Manaw Gododdin と呼ばれた。そのゴドウィン人は、ピクト民族と同様に部族社会（部族国家）を形成していたと考えられる。Din Eidyn (Edinburgh) や Traprain Law や Din Baer (Dunbar) には、ブリトン人の在来の王（従属王）が住んでいたと思われる。

5世紀から6世紀にはその地域をゲルマン系アングル人が侵攻し、遅くともロージアンからベニクシャー（すなわちフォース湾からティーズ川）にかけてベルニシア王国 (Kingdom of Bernicia あるいは Berneich) が6世紀には建てられたと思われる。その王国は、イングランド北部のノーザンバーランドやダラムならびにスコットランドの東ロージアンやベニクシャーの海岸線沿いに建てられ、その建国者のアングル人の中心は、一部はローマ時代のハドリアン・ウォールの傭兵、他の一部はデイラ王国からの移民であったと考えられる。

ベルニシア王国の初代王と知られているのは、イダ王 (King Ida) (在位 547年頃-559年) であった。彼の国王在位期間については、『Anglo-Saxon Chronicle』から知られる。その王

² この地域も the Hen Ogledd (the Old North) と呼ばれた。どれ程の人口であったかは不明である。

国の中心地にバンブルグ城 (Bamburgh Castle) を建て、バンブルグをベルニシア王国の都とした。彼には12人の子(7人の息子)があった。その中の何人かは王になった。イダ王の治世の間では、ベルニシア王国の勢力はベニクシャー海岸沿いにあった。第2代目の王は、グラッパ (Glappa) (在位559年?)であった。彼は、イダ王の12人の子の中の1人の息子で、その治世については知られていない。第3代目の王は、アダ (Adda) (在位559年?-580年あるいは568?)であった。彼もイダ王の7人の息子の1人で、Caer Greu³の戦い(580年)でのベルニシア軍の総司令官であったのかも知れない。この戦いで、ブリトンの王ペルドル (Perdur) (在位不詳)とエブラウク (Ebrauc; 現在のYork)の王が殺害され、ブリトン人のエブラウクはデイラ王国に奪われた。第4代目の王は、アシルリック (Æthelric) (在位568年-572年)であった。彼は、イダ王の息子の一人であり、8代目の王であるアシルフリス (Æthelfrith)の父親であった。彼の治世については何も知られていない。第5代目の王は、セオドリック (Theodric) (在位572年-579年)でイダ王の息子の1人であった。彼と彼の息子は、レゲド (Rheged)⁴王国の王ウリーン (Urien)⁵ (在位550年?-590年)によって、3日間、リンディスファーレンに包囲されたと言われている。セオドリック王は、人質を要求したが、ウリーン (Urien)の息子オーエン (Owain) (595年没?)がその提供を拒否したので、戦いになり、オーエンによって殺害された。第6代目の王フリスワルド (Frithuwald)

³ 現在の地名は不明である。『Anals Cambriae』には、この戦いは580年に起こったとある。『Historia Brittonum』には、AddaはIda王の死後8年治めたとあるので、このときのベルニシアの司令官は他のベルニシア王(あるいはデイラ王アル (Ælle))であったのかも知れない。

⁴ この王国は、中世初期において、北西イングランドの現在のカンブリア、および、多分、ランカシャー州およびスコットランドに広がっていた王国であろうと推測される。この王国が、Llvennetの支配者と言及されるときには、この王国はウェストモーランド州に位置したと理解されている。この王国は、吟遊詩人によって詠われた王国でもあった。この王国は、レゲド王ウリーンとその家系に結びつけられる。この王国は、ベルニシア王国がデイラ王国を合体した後、ノーザンブリア王国に吸収された。その方法は宮廷結婚によった。638年に、ノーザンブリア王国のオズウィ王子(後のオズウィ王)とレゲドの王女リムメルス (Riemmelth)とが結婚した。レゲド王国は平和裏にノーザンブリア王国に取られた。すなわち、両国は同じ王によって継承された。

⁵ 6世紀後半のレゲド王国の王であったが、詩人 Taliesin によって、グウェン・イストラ (Gwen Ystrad) およびアルト・カルト (Alt Clut) における彼の活躍で賛美された王であった。彼の父は、Cynfarch Oerであり、この父の祖先は、ローマ退却後のハドリアンウォール地域の軍事指導者であった Coel Hen (King Cole) の末裔であった。彼は、アルト・カルト (ストラスクライド) 王のリデフ・ヒール (Rhyddech hael) および別のブリトン王 (Gwallog mab Llaenog, Morgant Bwlch) と連携して、ベルニシア王国の王イダに対して戦った。しかし、彼は、モルガン・プルフ (Morgant Bwlch) の嫉妬のために、モルガン (Morgant) によって暗殺された。

彼は、伝説上の人物である。彼は、アーサーの妹 Morgan le Fay と結婚し、アーサーの王位継承に反対し、彼と他は反乱を起こしたが、しかし、戦いに敗れた。その後、彼は、アーサーの連隊の家臣になった。アーサーとウリーンは、モルガンと彼女の愛人アコロン (Accolon) に殺害される。彼らが王位を継承した。

(在位 579 年-585 年)⁶ は、イダ王の息子の 1 人であった。彼の生涯や治世の詳細は何も知られていない。第 7 代目の王フサ (Hussa) (在位 585 年-592 年) は、イダ王 (Ida) の息子の 1 人であったかどうかは確かではない。彼は、レゲド (Rheged) やアルト・カルト王国の王などの連合軍に包囲され、危うくイングランドから追放されそうになった。しかし、ブリトン内部の分裂がウリーン (Urien) の殺害に発展し、彼は追放されるには到らなかった。彼の死後、彼の家系は、アシルフリスの家系から分裂し、そして、フサ (Hussa) の息子ヘレリック (Hereric) は、603 年頃のデグサスタンの戦い (Battle of Dgsastan) でダル・リアダ王国のカブラーンの息子アイダーン (在位 574 年?-608 年) 側について戦った。

1.2 ゴドウィン王国の滅亡とノーザンブリア王国

第 8 代目のバルニシア王はアシルフリス (Æthelfrith) (在位 593 年-616 年) であった。彼が王のとき、この王国はイングランドの内陸に進行し、その領土を拡大した。彼は、デイラ王⁷ アシルリック (Æthelric) (在位 589 あるいは 599 年-604 年) を征服し、604 年頃にバルニシア王国とデイラ王国を統合し、ノーザンブリア国王を建国した。その両国の統合によって、一旦、デイラ王国の血筋が途絶えることになる。彼はキリスト教徒ではなかった。

彼の領土拡張の戦いを概観してみよう。初めに、彼とブリトン人との戦いを取りあげよう。600 年頃に、カトリース (Catraeth) (北ヨークシャーの Catterick) において、ゴドウィン人とアングル人との間で戦いが繰り広げられた。このアングル人がノーザンブリア人であったと思われる。ゴドウィン王 (Mynyddog Mwynfawr)⁸ は、ストラスクライドやエルメト (Elmet)⁹

⁶ 彼の在位期間は推定による。

⁷ デイラ王国の最初の王は、アラ (Ælla) (在位 559 あるいは 560 年-588 年) であった。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、彼は 560 年に王に即位し、588 年に死亡している。彼の息子の 1 人がエドウィン (Edwin) であり、彼の娘アハ (Acha) は、バルニシア王国のアシルフリス (Æthelfrith) と結婚した。デイラ王国の第 2 代目の国王は、アシルリック (Æthelric) であったと思われる。デイラ王国は、バルニシアのアシルフリスに侵攻され、604 年頃に乗っ取られた。このとき、エドウィンは周辺国に逃亡した。アシルリックが殺害されたか、逃亡したかは分からない。

⁸ この王が実在した人物かどうかははっきりしない。Y Gododdonn に登場する人物名で王を示している。この人物に該当する人物は見付かっていない。もし実在した人物ならば、彼は、エディンバラに宮廷を持つ王であったのであろう。また、他の説では、Mynyddog Mwynfawr を地名の擬人化であり、エディンバラあるいはゴドウィンを意味すると解釈されている。

⁹ このエルメト王国は、5 世紀から 7 世紀にかけて存在した東ブリテンのローマに従属したブリテン王国 (レゲド、ストラスクライド、エブラウク、ブリネイハ、ゴドウィンなどのブリテン王国) の一つであった。現在のヨークシャーの西 Riding (リディング付近) に存在したと思われる。その境界であるが、南は sheaf 川、東は Whartfe 川であった。その北はデイラ王国に隣接し、その南はマーシャ王国に隣接し、その西の境界は Craven 王国に隣接していた。616 あるいは 626 年にノーザンブリア王国に侵攻され征服された。その後、627 年に Elmet 王国はノーザンブリア王国に吸収された。その住民は Elmetscete として知られる。

やグウィネッズ (Gwynedd) やエディンバラ王キノン・エディン (Cynon Edidin) (在位期間不明) 等のブリトンの王国から、ディン・エイディン (Din Eidyn: 現在の Edinburgh) に 300 人の勇士を集め、精鋭部隊を形成し、カトリースにあったベルニシアの要塞を襲撃し、ベルニシアの北上進行を食い止めようとした。この戦いについては、その戦いで戦死したブリトンの英雄的な戦闘を讃える挽歌である "Y Gododdin" の詩に詠われている。ブリトン人の連合体は、この戦いでアングル人に大敗した。このときのアングル人の王がアシルフリス (Æthelfrith) であったと思われる。その後、ゴドウィン王国の都であったディン・エイディンが 638 年に落ち、7 世紀半ばには、ベルニシア王国にゴドウィン王国は滅ぼされた (あるいは吸収された) と思われる。その地域は、その後には、ベルニシア王国¹⁰ に治められるようになったことから推測される。

次に、ダル・リアダ王国との戦いを取りあげてみよう。このころにはダル・リアダ王国もブリトン人との戦いを制して東進していた。603 年頃のデグサスタンの戦い (Battle of Degsastan) において、ベルニシア王国はダル・リアダ王国と衝突した。ダル・リアダ王国の王であったカブラーンの息子アイダーン (Áedán mac Gabráin) (在位 574 年? - 609 年) は、ノーザンブリアのアシルフリス王に敗れた。この戦いの詳細については不明であるが、その根本的な原因は、ダル・リアダ王国の東進ならびに南下政策とノーザンブリア王国の西進政策ならびに北上政策による、両王国の領土拡張政策の衝突であったと推測される。この戦いの後、アシルフリス王は、ダル・リアダ王国と講和条約を結んだと推測される。それは、彼の死後、彼の息子オズワルドやオズウィがダル・リアダ王国に亡命していることによる。604 年頃には、アシルフリス王は、自身の治めるベルニシア王国とデイラ王国を併合・統合し、ノーザンブリア王国を形成し、アングル人の領土を拡げた¹¹。アシルフリス王がデイラ王国を手に入れたことは、デイラ王国の王子であったエドウィン (Edwin) とヘレリック (Hereric) の国外への逃亡から推察することができる。

次に、ブリトン人 (ウェールズ) との戦いを取りあげよう。613 年から 616 年にかけて、アシルフリス王は、ポウイス王国 (Kingdom of Powys)¹² の王セリフ・サルフガダウ (Selyf

その王国は 600 hides の小領域であった。

この王国の存在は、『Historia Brittonum』で明らかである。そこには、ノーザンブリア王エドウィンが Elmet を征服し、その王セルテック (Certic) (619 年没?) を追放したとある。この出来事は、616 あるいは 626 年に起こった。その戦いの理由は、Elmet に亡命していたノーザンブリアの貴族ヘレリック (Hereric) の毒殺にあったのかも知れない。この毒殺に Edwin 王も関係していたと思われる。

¹⁰ その主な中心地は、バンバラ (Bamburgh)、ダンバー (Dunbar)、ゴールドインガム (Goldingham) であった。

¹¹ アシルフリスが統治した領土は、ピクト王国およびダル・リアダ王国の土地から南はウェールズおよびミッドランドに及んだ。彼の統治は、軍事的力による統治であったと思われる。

¹² ポウイス王国は、5 世紀から 12 世紀にかけて、ブリテンからローマが撤退した後の中世に興った小王国あ

Sarffgadau) (616 年没)¹³ を攻撃した。615 年あるいは 616 年のチェスターの戦い (Battle of Chester) でその軍 (混合軍) を撃ち破り、ポウイス王国の王セリフ・サルフガダウは、Cetula と呼ばれる王¹⁴ やグウィネッツ王国のイアゴ王 (Iago ap Beli) (在位 599 年? -616 年?) と

るいは公国である。その領土は、西はオールドヴィイクス (Ordovices)、東はコルノウィイ (Cornovii) のローマ・ブリティッシュ部族の土地が中心で、西のカンプリア山脈から東のイングランドの西ミッドランド地域に広がっていた。セヴァーン川 (River Severn) とターン川 (River Tern) の肥沃な渓谷にあった。その地域は "Paradise of Powys" (ポウイスの楽園) とウェールズ文学では呼ばれた。中世のはじめには、ポウイス王国はグヴェルスイニオン家 (Gwerthynion dynasty) によって支配された。この王家は、ヴォルティガーン (Vortigern) と西ローマ皇帝マグナス・マキシム (Magnus Maximus) (在位 383 年-388 年) の王女セヴィリア (Sevira) の結婚による子孫であったと思われる。これは、Viroconium Cornoviorum あるいは Caer Guricon (現在の Wroxeter (ロクセター)) を中心都市にしていたが、6 世紀になると、疫病によって人口が減少し、さらにマーシャなどのアングル人のイングランド移民に侵略された。ブロックウェル・イスギイスログ王 (Brochwel Ysgithrong) (560 年没) は、その宮廷を Caer Guricon からペングワーン (Pengwern) (シュルーズベリーの近く) に移した。

ポウイス王国はノーザンプリア王国の侵略を受けた。615 年あるいは 616 年のノーザンプリア王国のアシリフリス王 (Æthelfrith) とのチェスターの戦いを行った。この戦いの開始前に、アシリフリス王は 1,200 人の修道僧を殺害し、アシリフリス王の大勝利であった。この戦いでセリフ・サルフガダウ王 (Selyf Sarffgadau) が殺害された。また、642 年のノーザンプリア王国のオズワルド王が殺害されたマザーフィールドの戦い (Battle of Maserfield あるいは Battle of Maes Cogwy) にポウイス王国の軍隊は参加したと思われる。この戦いは、マーシャ王国とペングワーン小国の連合軍とノーザンプリアとの戦いであったが、ペングワーンの王はポウイス王国の出身であったので、この戦いにポウイスの軍隊も参戦したと思われる。この戦いの後、ポウイス王国はマーシャ王国に侵略され、ペングワーン地域は略奪され、マーシャ王国に併合された。

その後、ポウイスは再興し、エリゼド王 (Elisedd ap Gwylog) (在位 725 年-755 年?) の時に、宮廷を Mathrafal Castle (Mathrafal は Welshpool の近くにあり、ポウイス王国の王や王女の主な居住地であった) に移した。この王の働きが、マーシャ王アシルバズに Wat の防塁 (Wat's Dyke) を建設させたと考えられている。マーシャとの境界は、セヴァーン渓谷からデー川の河口へ伸びていた。この境界では Oswestry がポウイス王国に与えている。アシルバズ王の後の国王 Offa の時にも、マーシャ王国はポウイス王国との国境に防塁 (Offa's Dyke) を建築し、Oswestry をマーシャの領土内に取り戻し、マーシャ王国をその攻撃から防衛したと思われる。実際、760 年にはヘリフォードで戦い、そして、778、784 及び 796 年にもオフア王はポウイスと戦っている。

ポウイス王国は、Brochwel Ysgithrong 家系のキンガン王 (Cyngen ap Cadell) (在位 808 年-855 年) の姉妹 Nest ferch Cadell (生没不詳) とグウィネッツ王国のメルフィン・フリク王 (Merfyn Frych) (在位 825 年-844 年) とが結婚し、グウィネッツ王国に併合された。その王は、長い治世の後、王位を奪われ、ローマ巡礼を行い、855 年にその地で死亡した。また、彼は曾祖父エリゼドの円柱十字架の記念柱 (Pillar of Eliseg) を建てた。彼の死亡 1 年前にグウィネッツ王国の王位を継承していたロズリ大王 (Rhodri the Great) (在位 854 年-878 年) が、彼の母親を通して、ポウイス王国の王になった。彼は、ウェールズの大半を支配下に入れたが、878 年に死亡した。彼には 3 人の息子があった。彼の死後、ウェールズは分割相続された。ポウイス王国は、メルフィン (Merfys ap Rhodri) (在位 878 年-900 年) によって相続され、また、Anarawd ap Rhodriha は、Aberffraw 王朝でグウィネッツ王国を築き、Cadell ap Rhodri は、Dyfed 王国を征服した。

¹³ 『Annals of Ulster』によると、彼は、ブリトン人達の王と呼ばれている。これは、ノーザンプリアに対抗したブリトン王国の連合体 (混合軍) を指揮したという意味であろう。

¹⁴ この王は、Cadwal Crysban of Rhôs であったと思われる。Rhôs は、北ウェールズの荒野 (Moor) を意味する。

共に殺害された。この戦いの原因は確定していない¹⁵が、この戦いでノーザンブリア王国の大勝利は、戦略的に重要な意義を持っていた。ノーザンブリア王国の観点からすると、ブリトン人をウェールズの戦力と北 (Old North) の戦力に2分した。また、カンブリアとストラスクライドの2つにウェールズのブリトン人が分離し、ブリトン人の力は削がれた。

アシルフリス王は、逃亡中のデイラ王国の王子ヘレリックをエルメト王国の宮廷で毒殺し、エドウィンには賞金をかけ、東アングリア王国¹⁶に逃亡していた彼の引き渡しをその王レッドバルド (Rædwald) (在位 599? -624年?)に求めた。その東アングリア王は、その引き渡しの申し出に一旦同意したが、彼の妻がそれを思い止まらせた。東アングリア王国のレッドバルド王は、兵を集め、アシルフリス王と戦った。616年頃にアイドル川 (River Idle)¹⁷の東側でアシルフリス王は大敗し、殺害された。彼の死後、デイラ王のみならずベルニシア王を継いだのがエドウィン (Edwin) (在位 616年-633年)であった。アシルフリス王の息子のエンフリス (Eanfrith) はピクト王国、オズワルド (Oswald) はダル・リアダ王国、およびオ

¹⁵ 歴史家 Geoffrey of Monmouth によると、エドウィンがグウィネズ王国で逃亡生活をしていたので、アシルフリスは彼を捕らえるためにポウイス王国内を通過しようとして、ポウイス王国の王セリフ・サルファガダウと衝突したのではないかと推察される。これが直接的な言い掛かりであったとしても、アシルフリスの領土拡大政策の一環としてポウイス王国を侵攻したと考えるのは妥当であろうと思われる。

¹⁶ 東アングリア王国は、独立したアングロ・サクソンの王国であった。現在のノフォーク、サーフォーク、そしてケンブリッジ州を含んでいたと思われる。その北と東は北海に囲まれ、その西は沼地であった。その民族は、450年頃に北ドイツのアングルから移住してきた民族であったと考えられる。7世紀の初めに、レッドバルド (Rædwald) が王位にあったとき、東アングリア王国はアングロ・サクソン王国のなかで最も力のある王国であった。彼の父はティティル (Tytil) (在位 578年-599年)であった。彼の王家は、ウッフア (Wuffa) (在位 571年以前-578年)の名に因んで Wuffings と呼ばれた。616年にアイドルの戦い (Battle of Idle) でノーザンブリア王国を破り、その王アシルフリスを殺害し、その勢力を拡大した。だが、その名声は長続きしなかった。マーシャ王国のペンダ (Penda) (在位? ; 655年没)の台頭によって、東アングリア王国は衰退した。640年あるいは641年にマーシャ王ペンダ (Penda) が東アングリア王シゲベルト (Sigeberht) (在位 629年-634年?)とエグリック王 (Ecgric) (在位 634年?-636年)を殺害した。さらに、エグリック王の後継者アンナ (Anna) (在位 636年-654年)とその息子は、654年にバルカンプの戦い (Battle of Bulcamp) で戦死した。これによって、東アングリア王国はマーシャ王国を最高支配者とする国に従属した。655年にアシルヘレ王 (Æthelhere) (在位 654年)は、Penda軍に加わり、ノーザンブリアのオズウィ (Oswiu) (在位 642年-670年)との間のウィンウエードの戦い (Battle of Winwaed) で壊滅的に惨敗し、Pendaもアシルヘレ王も戦死した。

その後、9世紀の初めまでには東アングリア王国は、マーシャ王国の支配下にあり、825年にマーシャ王国から独立した。東アングリア王国のアシルスタン (Æthelstan) (在位 827年-840年代)は、肖像のついた、あるいは、肖像なしの硬貨を大量に発行し、マーシャ王国のベアーンウルフ王とルツカ王と戦い、彼らを殺害し、東アングリア王国は独立したと考えられる。次の王は、アシルウエアーズ (Æthelweard) (在位期間不明)であった。彼の在位期間は不明であるが、彼は840年代中頃、あるいは、その後半に王位に就いたと思われる。そして854年に死んでいる。彼は、マーシャ王国にもウェセック王国にも属していなかった。このことは、残されている硬貨から判断される。しかし、870年以降、ヴァイキングが侵攻し、その支配に入り、10世紀にはウェセックス王国に吸収された。

¹⁷ この川は、ノッティンガムシャーを流れる川で、その源は Maun 川と Meden 川である。

ズウィ (Oswiu あるいは Oswy) はダル・リアダ王国あるいはアイルランドにあったピクトの国にそれぞれ逃走したと見られる。

第9代目の王は、ベータによると、その当時最も力のある国王と賞賛されたエドウィン (Edwin) (在位 616年-633年) で、デイラ王国の王アラ (King Ælla) (在位 559年あるいは560年-588年) の息子であった。604年にデイラ王国がベルニシア王国のアシルフリス王に乗っ取られたとき、彼はグウィネッズ (Gwynedd) 王国¹⁸ に逃れたという説がある。次に、610年にはマー

¹⁸ グウィネッズ (Gwynedd) 王国は、5世紀から13世紀後半まで存続したウェールズの小さな王国である。ローマ人がブリタニアを去った410年以降、ローマ時代に Venedotia と知られていた地域に、ローマ人の侵攻以前からそこに住んでいた少数民族 (Ordovices や Gangani や Deceangli) が復興した。この王国は少数民族を基盤として構成されていたと考えられる。

ニンニウス (Nennius) (809年没) は、その王国の基礎の形成者をグネダ (Gunedda) (在位不詳; 5世紀) としている。彼が初代の王であった。ニンニウスの『Historia Brittonum』によると、彼は、彼の息子とその従者と共に、マナウゴドウィン (Manaw Gododdin; 現在のクラックマナンシャー辺り) から、ピクトとの戦いに敗れて、そこに移住してきた。グウィネッズの宮廷は Deganwy 城であった。彼と彼の息子は、450年頃に、アイルランドの Uí Liatháin と Laigin などの侵入者を追放した。彼の死後、その王国は、その地域の慣習によって彼の息子の中で分割された。グネダ (Cunedda) の後継者は、エイニオン・イルズ (Einion Yrth) (在位 470年?-500年) であった。2代目の王であった彼は、470年頃にアイルランド人を追い出し、彼の兄弟ケレジギオン (Ceredigion) やメイリオン (Meirion) と共に統治に務めたと思われる。そして3代目の王カドワロン・ラウヒール (Cadwallon Lawhir) (在位 500年?-534年) は、Angelesey (Isle of Angelesey) のアイルランド人を軍事力によって完全に追い出し、王国を統合し、強大な王国になる基礎を築いた。グウィネッズ王国は、カンブリア地域で卓越した地位を築いた国王であった。この Lawhir は、“長い手”を意味する。この渾名は、実際に彼の腕が長かったのかも知れないが、彼の統治期間が長かったことに対する比喩かも知れない。

彼の曾孫マエルギン・ヒール (Maelgwn Hir) (547年没) が4代目の王であった。彼は、Deganwy 城に彼の要塞を築き、キリスト教のウェールズでの普及に貢献した王であった。しかし、Gilda の『De Excidio et Conquestu Britanniae』では、歴史上道徳的には最も不人気な5人の国王の中の1人に入れられている。5代目の国王は、マエルギンの息子ルン・ヒール (Rhun Hir ap Maelgwyn) (在位 547年?-586年?) である。6代目の国王は、彼の息子ベリ (Beli ap Rhun) (在位 586年?-599年?) であった。7代目の国王が、ベリの息子のイアゴ (Iago ap Beli) (在位 599年?-616年) であった。彼の治世下において、グウィネッズ王国とポウイス王国 (Kingdom of Powys) は、侵攻するアングル人のベルニシア王国とデイラ王国の進行を食い止めるために共同して行動した。613年のチェスターの戦い (Battle of Chester) では、両国は共同してアングル・サクソン王国と戦ったが、ブリトン側の惨敗であった。これにより、ブリトン側は、ウェールズと Old North (カンブリアとストラスクライド) に分断された。第8代目の国王は、イアゴの息子カドファン (Cadfan ap Iago) (在位 616年?-625年?) であった。この王についてもよく知られていない。彼は、聖ベウノ (Saint Beuno) (640年没) のパトロンであった。ベウノは、Clynnog にある修道院の大修道院長であり、616年に Clynnog に修道院を建てた。カドファン王は、彼に広大な土地を約束した。この約束は、次の王カドワロン Cadwallon によって実行され、彼に60頭の牛に相当する金の券を謝礼として与えるものであった。第9代目の王は、カドファンの息子カドワロン (Cadwallon ap Cadfan) (在位 625年?-634年) であった。彼は、ノーザンブリア王エドウィンの野心に翻弄された国王であった。エドウィンはエルメト王国を吸収し、アイルランド海に道を開き、彼の支配をマン島やアングルシー (Anglesey) 島に及び、カドワロン王は、服従するか逃亡するかいずれかの選択肢しかなかった。彼は、629年頃に、アイルランドに逃亡した。その後、グウィネッズに戻り、マーシャ王国のペンダ王 (King Penda) などと協

シャ王国(Kingdom of Mercia)¹⁹に逃れ、キアール王(King Cearl) (在位 606年?-626年?)の保護を受け、その娘ケウンブルガ(Cwenburga)と結婚した。616年頃には、彼は、東アン

働でエドウィンを倒した(633年のハトフィールド・チェーズでの戦い(Battle of Hatfield Chase))。その後もウェールズはアングルと敵対した。

¹⁹これは、6世紀初めから10世紀初めにかけて存在した、アングロ・サクソン7頭政治王(Heptarcy)の国の1つである。マーシャ王国(Kingdom of Mercia)は、トレント川渓谷とイングランド中央の従属国を中心とする王国であった。マーシャ王国は、ノーザンブリア王国、南ウェールズのポウイス王国、東アングリア、ウェセックス、エセックス、およびサセックスに接していた。また、Merciaは、境界の人々を意味し、ウェールズとアングロ・サクソン侵攻者の境界にいる人々を意味している。マーシャ王国のアングロ・サクソン人のイングランド上陸後の発展の軌跡は、ノーザンブリア王国やケント王国ほど明らかにされていない。マーシャ王国は、現在のダービシャー、レーシスターシャー、ノッティンガムシャー、スタフォードシャー、およびウオーリックシャーの大半を覆っていた。

マーシャ王国の礎になった要塞をTamworthに築いたのは、クレオダ王(Creoda) (在位 584年?-593年?)であった。彼の息子ピイバ(Pybba) (在位 593年?-606年?)が彼の後を継いだ。キアール(Cearl) (在位 606年?-626年?)の時に、デリラ王国の逃亡王子エドウィンを匿った。キアールの娘キウエンブルガ(Cwenburga)とエドウィンが結婚した。このエドウィンは、ノーザンブリア王国の王であり、かつ、南ブリテンでの上王(High King)あるいは大君主権(Overlordship)になった。次のマーシャ王国のペンダ王(King Penda) (在位 626年?-655年)は、グイネズ王国のカドワロン王と連合して、633年にエドウィン王を倒し、殺害した。また、642年にマザーフィールドの戦いでノーザンブリア王国のオズワルド王を敗北させ、彼を殺害した。ノーザンブリア王国は混乱したが、655年にノーザンブリア王国のオズウィ王がペンダ王を敗北させ、彼を殺害した。

ペンダ王の後継者は、彼の息子ピエダ(Peada) (在位 653年?-656年)であったが、彼は、オズウィ王に従属した王であったと思われる。彼は、656年にオズウィ王に殺され、マーシャ王国はノーザンブリア王国の支配下に入った。このマーシャ王は、キリスト教に改宗した最初のマーシャ王であった。658年にペンダ王の別の息子ウルフヒレ(Wulfhere) (在位 658年-675年)は、マーシャ王国をノーザンブリア王国から独立させたが、しかし、675年にノーザンブリア王国に大敗北し、殺害された。679年にアシルレッド王(Æthelred) (在位 675年-704年)は、トレント川の戦いでノーザンブリア王国に勝利した。これ以降、ノーザンブリアが南を犯すことはなかった。また、このときマーシャ王国は、リンゼイ王国を取り戻した。しかし、狂気で死亡したキオルレッド(Ceolred) (在位 709年-716年)王をもってペンダ王の血筋が絶えた。

キオルレッド王が宴会の席で死亡した後に、アシルバルド(Æthelbald) (在位 716年-757年)が王位に就いた。彼は、ペンダ王の兄弟エオワ(Eowa)の孫にあたる血筋であった。彼の治世の時にマーシャ王国の勢力をペンダ王やウルフヘレ王の時代の勢力に戻した。731年までにはハンバー川の南を支配する王国になったと思われる。このことを直接示す資料は見付かっていないが、国王の勅許状によって傍証することができる。エセック王国の支配にあったロンドンがマーシャ王国に従属していたことを示す勅許状がある。また、マーシャ王国は、サセックス王国も支配に入れていたと思われる。ウェセックス王国のクースレッズ王(King Cuthred)との激戦が『Anglo-Saxon Chronicle』には記録されている。752年のブルフォードの戦い(Battle of Burford)に勝利して、彼は西サクソン(ウェセックス)全土を支配下にした。また、ウェセックス王国のキネウルフ王(King Cynewulf)が就任するとき、アシルバルド王の勅許状の証人として記録されていることから、アシルバルド王は、ウェセックスを支配していたと推測される。

彼の後継者は、オフア(Offa) (在位 757年-796年)であった。彼は、760年にヘリフォードの戦いで、ブラキンニヨグ(Brycheiniog)王国、グウェント(Gwent)王国ならびにポウイス王国のウェールズの連合軍に敗れた。彼は、保塁をウェールズ国境に築き、その国境を建設し、南ブリティシュを統合した。彼は、リンゼイ王国、東アングリア王国、エセック(ロンドンを含む)王国、ケント王国、またサセックス

王国を支配下に置き、ウェセックス王国と同盟を結び、ハンバー川の南のアングロ・サクソン国の中で最も有力な王国を形成した。その後、コーンウルフ (Cœnwulf) (在位 796 年-821 年) までその勢力を保ち、彼の息子ケオルウルフ (Ceolwulf) (在位 821 年-823 年) に継承された。

マーシャ王ベオンウルフ (Beornwulf) (在位 823 年-825 年) は、ケオルウルフ王よりも戦闘的であった。このベオンウルフの祖先は不明で、彼の父親は貴族であった。彼は、ポウイス王国を征服し、続いて 825 年にウェセックス王国のエクブリス (エグバート) 王 (King Ecgbriht あるいは Egbert) (在位 802 年-839 年) を攻撃した。ウィルトシャーの Swindon の近くの Wroughton で戦われたエレンダンの戦い (Battle of Ellendun) でベオンウルフ王は敗北した。これに続いて、マーシャ王国は、ケント王国を侵攻し、その王を追放した。エセック王国やサセックス王国は、マーシャ王国を離れ、ウェセック王国に忠誠を移した。東アングリア王国は、ウェセック王国の庇護の下でマーシャ王国に対し反乱を起こした。彼は、その乱を押さえようとしたが、殺害された。彼の後継者は、ルヅカ (Ludeca) (在位 825 年-827 年) であったが、東アングリアに対する戦闘で殺害された。彼の後継者は、ウィグラフ (Wiglaf) (在位 827 年-829 年、830 年-839 年) であった。彼の祖先も不明である。このころの 820 年代には、ウェセック王国が権力を伸張させた一方、マーシャ王国内で王家の衝突が起こった。彼は、829 年にエグバート王に追放され、その 1 年以内に王に戻った。彼が王位を回復したが、ウェセック王国のエグバート王の大君主権の下にあったのかも知れない。しかし、その後もマーシャ王国は、イングランドの南と東の王国、すなわちウェセックの支配下に入ったと思われるサセックス王国やケント王国、ならびに独立を保った東アングリア王国の支配権を失った。

東アングリア王国のアシリスタン (Æthelstan) (在位 827 年-840 年代) は、肖像付きの、および、肖像なしの硬貨を大量に発行していて、また、ベオンウルフ王とルヅカ王と戦い、彼らを殺害した王として知られる。ただし、パークシャーとエセック王国は、マーシャ王国の支配下に戻された。ウェセック王国が 820 年代に急速に力を強め、830 年代のその力が急速になくなったと思われる。何故であろうか。それには、このウェセック王国のエグバート王とカロリング朝の関係を無視することはできない。830 年代にはカロリング朝の力も衰えた。それと呼応するようにイングランドではマーシャ王国が力を取り戻し、盛り返し、東アングリア王国が独立した。しかし、マーシャ王国の大君主権は、ウェセック王国の移り、その衰退は明らかになった。このことは、マーシャ王国の硬貨からも見るができる。ウィグラフ王の治世のもとでの硬貨は殆どない。硬貨には肖像付きの、あるいは、肖像なしの二種類の硬貨があったが、彼の治世の後半には、肖像なしの硬貨がほんの 2 枚しか見付かっていない。彼の後継者は、ベオルトウルフ (Beorhtwulf) (在位 839 年-852 年) であった。彼の祖先は分からない。彼の治世の間に (840 年代に) パークシャーの支配がマーシャ王国に移された。また、彼の治世の下でマーシャ硬貨の発行が再開された。その初め (841 年-42) は、ウェセック王国のアシルウルフ硬貨に似ていが、これはその片面にベオルトウルフ王の肖像を、他の面にアシルウルフ硬貨によって使用されたデザインを持っていた。その治世の後半 (840 年代後半) には独自のデザインの硬貨が発行された。

ヴァイキングの侵略によって硬貨の発行は停止された。彼の王権は不運であった。841 年、842 年、そして 851 年にヴァイキングの侵攻が記録されている。842 年の侵攻先はロンドンであった。『Anglo-Saxon Chronicle』には、大量虐殺が記録されている。851 年には Thanet 島に上陸し、350 艘の船でカタベリーやロンドンを襲撃したことが『Anglo-Saxon Chronicle』に記録されている。ヴァイキングは、ベオルトウルフ王を彼の軍隊共々追放した。そのヴァイキングは、ウェセック王アシルウルフ王とその息子達によって敗北させられた。これによってマーシャ王国は、ウェセック王国の従属国になったのかも知れない。彼の後継者は、ブルグレッズ (Burgred) (在位 852 年-874 年) であった。彼は、852 年に北部ウェールズを討つためにウェセック王アシルウルフに援軍を求めている。それを討って彼は、その王の娘と結婚し、ウェセック王国との同盟を結んだ。また、868 年にはノッティンガムを持っていたデーン人に対する援軍をアシルウルフとアルフレッド大王にも求めている。デーン人は、リンゼイーから攻め入り、彼に代えてケオルウルフ 2 世 (Ceolwulf II) (在位 874 年-881 年) を据えた。彼は、コーンウルフ (Cœnwulf) 王家の子孫であった。しかし、彼の直接的な子孫は分からない。彼は、マーシャの北と西を治め、ウェールズで活躍し

グリア王国でレドバルド王の保護下にあり、616年頃にアイドル川の東側でノーザンブリア王国のアシルフリス王を破り、彼を殺害した。東アングリア王国のレドバルド王はエドウィン王を支援した。

国王としてのエドウィンは、616年から626年にエルメト王国 (Kingdom of Elmet) をノーザンブリア王国に併合した。レドバルド王の死後、エドウィン王は、リンゼイ王国 (Kingdom of Lindsey)²⁰ の大半を支配し、625年にケント王国²¹ の王エズバルド (Eadbald) (在位 616

た。彼は、マーシャ王国最後の王であった。

10世紀後半のウェセック王国によるブリティッシュの一体化によってマーシャ王国は、消滅し、中央管理下のもとで州としてイングランド王国の一つの地域になった。

²⁰ エルメト王国は、7頭政治国の時代にあった小さなアングロ・サクソン王国であった。その領域は、ハンバー (Humber) と Wash (ウォッシュ) の間にあった。その首都は、リンカンであったと思われる。この王国は、その歴史的記録の初めから、外国の影響下にあった国家で、時にはデイラ王国、時にはノーザンブリア王国、時にはマーシャ王国の一部であった。そして、ヴァイキングの移住の間には、その国はすでに独立国ではなくなっていたと思われる。マーシャ王国の支配下に入ったと考えられる。

²¹ ケント王国は、ローマ人がイングランドから撤退した後ヨーロッパから南東イングランドに植民したゲルマン系ジュート人によって建設された。この王国は、アングロ・サクソンの7王国の一つである。8世紀にマーシャ王国に従属する王国になり、独立を失い、そして9世紀にウェセックス王国に従属する王国になった。10世紀にはウェセック王国を指導国とするイングランド連合国の一員になった。以上が簡単なケント王国の歴史的な概要である。以下でより詳細にその歴史を説明しよう。

ジュート人は、ブリテンの支配者に、アイルランド (スコット人) やピクト人からの侵攻に対する軍事サービスを提供し、その報酬として Thanet 島を受け取った。そして、ジュート人達はそこに定住し、そこで活動した。また、Geoffery の『Historia Regum Britanniae』によると、ブリテン王ヴォルティガーン (Vortigern) (5世紀初めから半ばに活躍した神話上の人物) は、結婚の祝いとして Cantiaci (Kent) 国をその持参金として、ジュートの軍人ヘンギスト (Hengest あるいは Hengist) (488年没?) の娘(ロウィナ) (Rowena) と結婚した。Hengest が初代のケント王国の王であったと思われる。その息子のヴォルティメール (Vortimer) (サクソンと戦ったブリテンの王で、神話上の人物) は、ジュート人の要求の増加に堪えかねてジュートを攻撃したが、戦いに敗れ、殺害された。ブリテン国は分裂解体し、ブリトン人はジュート人と和平交渉をしたと思われるが、これを資料で明らかにすることは困難である。

Hengest の息子 (あるいは孫) のオイズク (Oisc) (在位 488年-512年あるいは515年) が国王についた。彼が2代目の王であると思われるが、彼の治世についてはよく分からない。次に、オイズクの息子のオクタ (Octa) (在位 512年あるいは516年-534年あるいは540年) が王位を継承した。彼がオイズクの継承者であることは、ペーダの英国教会史に記されている。ペーダは、Oisc を Ossic と書いているが、この何れが正しいのか確定できない。また、オクタがヘンギストの息子であるという説もある。オクタとブリテン国との関係の記述は9世紀に著されたブリテン人の歴史『Historia Brittonum』に見られる。それは同時代の記述ではないのでここでは割愛する。さらに、『Anglo-Saxon Chronicle』にオクタ王が王位を就いた記録がない。資料間での不整合が見られる。

次に、オクタ王の息子のエオルメンリク (Eormenric) (在位 534年あるいは540年-564年あるいは580年あるいは590年?) が王位を継承した。これは、『Anglo-Saxon Chronicle』にも記録されている。この王がケント王国の最初の歴史上の王であった。彼の息子アシルバート (Æthelberht) は、フランク王国の王女 Berth と結婚した。彼のフランク王国との関係は深かったと推測される。次に、アシルバート (Æthelberht) (在位 580年代あるいは590年代-616年あるいは618年) が王位を継承し、彼の下で7世紀の初めにケント王国はその力を伸ばした。ペーダの英国教会史によると、彼は、Eormenis の息子であり、Hengist の子

孫であった。彼は、アングロ・サクソンの中で最初にキリスト教に改宗した王であったが、彼が何時にキリスト教に改宗したかは確定しない。カンタベリーのアウグスティヌス(Augustine) (6世紀半ば-604年没)が596年あるいは597年に使者としてイングランド(ケント王国)に遣わされたのは、Thanet島に上陸した年か、あるいは580年頃にフランク王国のチャリベルト王(King Charibert) (517年生?-567年没)の娘ベルタ(Bertha) (539年生-612年没)と結婚した年の何れかであろうと思われる。彼は、アングロ・サクソンの中で大君主(OverlordあるいはBretwalda)の資格が与えられた。彼は、604年にはエセックスで権力を握り、その王Saeberth(在位604年?-616年)をキリスト教に改宗した。また、東アングリア王国のレッドバルド王(King Roedwald)に対しても大君主権をもった。この王もキリスト教に改宗した。マーシャ王国に対し大君主権をもったかどうかは不明である。また、彼の治世下において金貨(shillings, scillingas)が発行されたと思われるが、彼の名前は刻印されていなかった。

彼の後継者は、息子のエズバルド(Eadbald) (在位616年-640年)で、王位に就いた後しばらくは生来の異教徒で、父の2番目の妻(stepmother)と結婚した。この結婚はキリスト教の戒律には反していた。彼は、この妻を諦め、フランク王国のEmmaを彼の2番目の妻とし、キリスト教に改宗した。彼の結婚ならびにキリスト教への改宗は、フランク王国との関係を強化するための外交的決定であった。彼の後継者は、息子のエオルセンバート(Eorcenberht)であった。彼は、ベードによると、ブリテンで最初に異教徒の偶像崇拜を破壊し、キリスト教のレントを執り行うことを命じた王であった。彼は、東アングリア王国のAnna王の娘ゼクスブルフ(Seaxburh) (699年没)と結婚した。後に王になったエクバート(Ecgberht) (在位664年-673年)とロスヘレ(Hlothhere) (673年-685年)は2人の息子で、イーリーの女子大修道院長エルメンヒルダ(EormnhildaあるいはErnmilda)は、彼らの娘であった。エルメンヒルダは、マーシャ王国のウルフヘレ(Wulfhere) (在位658年-675年)と結婚した。ウルフヘレは、ロスヘレとエズリック(Eadric)の義理の叔父であった。ウルフヘレに王位継承を反対されたロスヘレ(Hlothhere)の治世時に(676年に)マーシャ王アシルレッド(Æthelred) (在位675年-704年)による侵攻でロチェスターが荒らされ、教会も修道院も略奪された。エクバートの息子エズリックEadric (在位685年-686年)がロスヘレを倒し王位に就いた後に、686年にウェセック王国のカエズワラ(Caedwalla) (在位685年-688年)によってケント王国は征服された。彼は、ケント王国の王として彼の兄弟マル(Mul) (在位687年)を就けたが、ケントの反乱で殺害された。その後、カエズワラ王によってケントは荒廃させられた。彼がローマに巡礼に出発したのち、南ブリテンは、2あるいは3年間、無秩序状態になった。

マーシャ王アシルレッドに従属するオズウィン(Oswine) (在位689年-690年)が東ケントを治め、西ケントはエセック王の息子ジウォフハーズ(Swœfheard) (在位687あるいは688年-692年)とジウォフベート(Swœfberht) (在位689年)によって治められ、ケント王国は共同統治された。その後、初めジウォフハーズ(Swœfheard)と共同統治したウィトレツ王(King Witred) (在位690年-725年)は、マル王殺害に係わる補償をし、ウェセック王国の王イネ(King Ine) (在位688年-726年)と講和した。695年に発布されたウィトレツの規定(Law of Witred)が残っている。これは、ケント王国の権威を再確立するために定めたとと思われるが、主に宗教的な規定である。例えば、教会の非課税の権利、不規則な結婚に対する罰金、異教徒礼拝に対する罰金あるいは安息日の労働に対する罰金などの条項が含まれていた。

彼の死後、その王国は、アシルバート2世(Æthelbert II) (在位725年-762年)、エズバート2世(Eadberht II) (在位725年-748年)およびアルフリック(Ælfric) (在位725年)によって共同統治された。アシルバート2世の治世の後半、すなわち彼の甥(エズバートの息子)のエルズウルフ(Eardwulf) (在位747年-?)と共同統治した時には、ケント王国は、マーシャ王国の王オフア(Offa) (在位757年-796年)の大君主権の下に一時的に入ったと考えられる。アシルバート2世の死後、その息子のエズバート2世(在位762-?)とジゲレッド(Sigered) (在位762?)がケント王国を共同統治した。また、ジゲレッドとエンムズ(Eanmund) (在位期間不明)がその王国を共同統治した。その後、ヒーバート(Heaberht) (在位764年-765年)がその王国を統治したことが知られている。エクバート(Ecgberht) (在位765年-779年)やエルマンド(Eallmund) (在位784年)は、かろうじて、ケント王国の独立を保ったと思われるが、オフアは、785年にケント王国に対する大君主権を再度確立し、796年までケント王国を治めた。

年-640年)の姉妹アシブルグ(Ætheburg)と結婚した。エアドバルド王は、エドウィンにキリスト教に改宗することを条件に彼の姉妹との結婚を承諾した。彼は、ケント王国のエズバルド王と連携し、ウセックス王国の領土拡張の野心を妨害した。626年にはウセックス王国を侵攻し、クウィクエルム(Cwichelm)(在位不詳;636年没?)を敗北させた。同時に、エドウィン王は、西に進み、その領土の拡張を目指した。彼は、マン島ならびにアングルシー(Anglesey)島を攻撃し支配し、ウェールズのグウィネズ王国のカドワロン王をプフィン島(Puffin IslandあるいはPriestholm)で包囲した。さらに、アイルランド北東部のウルズ王国の王のダル・ナリゼ(Dál nAaide)のバエターンの息子フィアハネ(Fiachnae mac Báetáin)(在位不詳;7世紀初め)と戦っている。このウルズ王がベルニシア王国の中心地バンブルグ(Bamburgh)を包囲したという記録が残っている。これは、エドウィン王がマン島を包囲した頃のことであった。627年には、エドウィン王はアングロ・サクソン王の中の帝王(*imperium*)として君臨した。

エドウィン王は、633年にポウイス王国やこの王国のペングウェルン(Pengwern)王と協働したマーシャ王国のペンダ王(King Penda)²²(在位不詳;655年没)やグウィネズ王国

その年にマーシャ王オファが死ぬと、ケント王国で反乱が起こり、エズパート3世(Eadberht III Proen)(在位796年-798年)の下でケント王国は一時的に独立を勝ち取ったが、しかし、クースレツ王(King Cuthred)(在位798年-807年)の時に、マーシャ王国の王コーンウルフ(Coenwulf)(在位796年-821年)の支配下に再び入った。807年にクースレツ王が死亡すると、マーシャ王国のコーンウルフ王がケント王国を直接的に支配した。彼の息子キオルウルフ(Ceolwulf)(在位821年-823年)も直接的にケント王国を支配したが、彼が後にマーシャ王になるビオンウルフ(Beornwulf)(在位823年-832年)によって廃位されると、その従属王であったバルズレド(Baldred)(在位823年-826年あるいは827年)がケント王国を治めたと思われる。

しかし、826あるいは827年に、ウセック王国のエクパート(エグプリス)王(King EgbertあるいはEcgbrith)(在位802年-839年)の息子アシルウルフ(Æthelwulf)(在位839年-858年)によって従属王バルズレドが殺害されると、ケント王国をウセック王国が直接的に治めるようになった。その後、892年にアルフレッド大王によってハンバー川から南の領域であった南アングロ・サクソンが一つにされた。ケント王国は消滅した。しかし、同時に、イングランド全体がヴァイキングによって荒らされた。

²² このとき、ペンダが王位を継承していたかどうかは分からない。彼は、マーシャ王国(現在の中央部ミッドランド地域)の異教(キリスト教以外の宗教を信じる)王であった。彼は、ノーザンブリア王国の3人の国王と戦った。第1に、633年にハトフィルド・シャイズの戦い(Battle of Hatfield Chase)でエドウィン王を破り、彼を殺害した。第2に、642年にマザーフィールドの戦い(Battle of Maserfield)でオズワルド王を倒し、彼を殺害した。第3に、655年にウィンウエイドの戦い(Battle of Winwaed)でオズウィ王に敗れ、彼に殺害された。『Angle-Saxons Chronicle』では、ペンダは626年に王に就いたとしている。『Historia Brittonum』によると、ペンダは10年間治めたとしている。ペーダは、彼が22年間それを治めたとしている。最も妥当な説はペーダであろうと思われる。しかし、彼の在位期間を裏付ける資料は見つかっていない。

また、彼は、繰り返し東アングリヤ王国と戦っていた。オズワルド王の治世のとき、ペンダ王は東アングリヤ王のエググリク(Ecgric)(在位634年?-636年)とその前王シゲベルト(Sigebert)(在位629年-634年?)を殺害した。また、マザーフィールドの戦いで彼の勝利以降、エセックスに対する勢力を

のカドワロン王 (King Cadwallon ap Cadfan) の連合軍との南ヨークシャーのドンキャストターの近くのハトフィールド・チェーズでの戦い (Battle of Hatfield Chase) (633年あるいは632年) において、倒され、彼の息子のオズフリス (Osfrith) と共に殺害された。さらに、もう一人の息子エズフリス (Eadfrith) も殺害された。その後、ノーザンブリア王国は、再び、ベルニシア王国とデイラ王国に分断された。ベルニシア王国の王には、エンフリス (Eanfrith) (在位 633年-634年) が就いた。彼は、アシルフリス王の息子で、エドウィン王が実権を握っている間は、北方に、すなわち、スコット (ダリ・リアダ王国) あるいはピクト国に逃れ、そこで教育を受け、洗礼を受けた。彼はピクトの王女と結婚し、後にピクト王になるタロルガンあるいはタロルガン (Talorcan あるいは Talorgan)²³ (ピクト王の在位 653年-657年) を持った。他方、デイラ王国の王には、オズリック (Osric) (在位 633年-634年あるいは632年-633年) が就いた。オズリックは、エドウィン王の叔父の息子で、エドゥインとは従兄弟であったが、グウィネッツ王国のカドワロン王によって倒され、殺害された。第10代目の王は、エンフリス王であったが、多分、カドワロン王との共同統治であったろうと思われる。というのは、彼は、キリスト教以外の宗教 (多分カドワロン王の宗教) に改宗していることから判断される。彼は、王位継承後1年以内にカドワロン王達に殺害された。

1.3 ノーザンブリア王国の最盛期とその凋落

第11代目のベルニシア王は、オズワルド (Oswald) (在位 634年-642年) であった。彼は、ノーザンブリア国王アシルフリス王の息子であった。彼の父アシルフリスが616年にアイドル川の戦いで東アングリヤ王国のレッドワルド王とその連合軍によって殺害され、その国王の王にエドウィンが就くと、オズワルドはダル・リアダ王国に逃れた²⁴。633年にエドウィン

弱めたノーザンブリア王国にとってかわって、マーシャ王国のペンダ王が台頭してきた。彼は、彼の妹と縁を切ったエセック王国の王ケンウォル (Cenwalh) (在位 643年?-645年? 645年?-674年?) を追放した。ケンウォルフ王は東アングリヤに逃亡した。彼は、そのケンウォルフ王を匿った東アングリヤのアンナ王を殺害した。東アングリヤ王は、アンナの兄弟のエゼルヘレ (Æthelhere) 王によって引き継がれた。ペンダ王の東アングリヤ王国との関わりは、東アングリヤ王国の党派的争いに付け入り、中央アングリヤでのマーシャ王国の優勢を保つことであった。

ペンダ王はキリスト教徒ではなかった。彼の3人の息子 (Peada, Wulfhere, Æthelred) と2人の娘 (Cyneburh, Cyneswith) は、全て、キリスト教徒に改宗していた。アングロ・サクソン国王の多くがキリスト教に改宗する中で、キリスト教には寛大でありながらも、異教のまま、強い権力を掌握した国王であった。

²³ 654年にピクト王のタロルガン Talorcan (在位 653年-657年) は、ダル・リアダ王ドンハズ・マック・コネーフを殺害した。彼は、ベルニシア王国のエンフリス (Eanfrith) (在位 633年-634年) の息子であったが、ノーザンブリア王オズウィ王に従属した。

²⁴ オズワルドは、ダル・リアダ王国に逃亡中に、キリスト教徒になった。また、オズワルドはアイルランドで戦ったと思われる。

王がハトフィールド・チェーズでの戦い (Battle of Hatfield Chase) でマーシャ王国のペンダ王とグウィネズ王国のカドワロン王の連合軍によって殺害され、また 634 年に先のオズワルドの兄で、ピクト国に逃亡し、エドウィン王の殺害後にベルニシア王に就いたエンフリリスもまたカドワロン王とその連合軍に殺害された。オズワルドがベルニシア王国の王位を継承した。634 年に、オズワルド王は、ヘヴンフィールドの戦い (Battle of Heavenfield) でグウィネズ王国のカドワロン王と戦い、彼を殺害した。この勝利がオズワルド王に、再び、ベルニシア王国とデイラ王国を統治することを可能にした。また、彼は、エドウィン王と同様にアングロ・サクソン王国の中で帝王 (*imperium*) になった。彼の統治領域について正確には分かっていないが、彼は、使用する言語によって、ピクト王国、ダル・リアダ王国、ブリトン人の王国²⁵ およびアングロ・サクソン人の王国に分けて統治したと考えられる。しかし、アングロ・サクソン王国の全てがオズワルドに従ったわけではない。彼は、リンゼイ王国を支配していた²⁶ と見られるが、しかし、ハンバー川の南のマーシャ王国は、オズワルドの支配に団結して対抗した。オズワルド王は、西サクソン王国(ウェセックス王国) (Kingdom of West Saxons あるいは Kingdom of Wessex)²⁷ とは友好的な関係を保ったと思われる。と

²⁵ 638 年にゴドウィン王国の要塞都市であったエディンバラが包囲されたと記録されている。これは、ゴドウィン王国の滅亡を意味すると理解される。ノーザンブリア王国のオズワルド王がゴドウィン王国を支配したと考えられる。実際、650 年代には、ゴドウィン王国は Oswiu の領土になっていた。

²⁶ というのは、ベータによると、オズワルドの死後、彼の骨はリンゼイ修道院に運ばれた。これからリンゼイ王国は、エドウィン王の治世以後に、ノーザンブリア王国の支配下にあったと考えられる。

²⁷ ウェセックス王国は、6 世紀から 10 世紀初めにかけてイングランドの南西の西サクソン王国であった。この王国については、9 世紀後半にアルフレッド大王の命令で編纂された『Anglo-Saxon Chronicle』から知ることができる。ただし、この年代記は、ウェセックス王国に偏った記述の部分もあると言われている。これによると、西サクソン王国は、ケルディク (Cerdic) (在位 519 年-534 年) とその息子キンリック (Cynric) (在位 534 年-560 年) の 2 人の部族長 (ゲウィゼ (Gewisse) という部族) によって建国された。その年代記によると、ケルディクとキンリックは、495 年に 5 艘の船で Cerdicesora (サウザンプトン Water) に上陸したとある。その領土は、その年代記によると、ハンプシャーとその周辺の地域 (ワイ島を含む) であった。しかし、考古学的資料によって、それよりも北に西サクソンの中心地域があったと思われる。それは、テムズ川上流の渓谷や Cotswold 領域に初期の中心があったと推察される。6 世紀後半から 7 世紀にかけて、そこから南及び西に領土を拡大し、ワイ島をジユートから奪ったと思われる。

キンリックの次は、キーウリン (Ceawlin) (在位 560 年-592 年) であった。彼は、ベータによって、アングロ・サクソンの 7 人の大君主 (*imperium*; Overlord) の一人に挙げられている。実際、彼はハンバー川南の全土を征服してはなかったが、大君主にされている。彼の在位期間には異説もある。この期間は『Anglo-Saxon Chronicle』によっている。異説では、その期間は 7 年あるいは 17 年となっている。キーウリンは西サクソンの領土を北と西に拡大した (しかし、その拡大した領土は、後の 628 年にマーシャ王国のペンダ王に奪われた)。Chilterns 北東のブリトンの孤立地域を征服し、グロスターシャーとサマーセット州の Cirencester, Gloucester および Bath を奪い、西への道を開いた。彼のブリトンとの戦いについては、『Anglo-Saxon Chronicle』に記されている。それによると、577 年のディラムの戦い (Battle of Dyrham) でブリトンを負かし、先に示した 3 都市をブリトンから奪った。これによってサクソンがプリストル海峡に達することを可能にし、セヴァーン川の西に住むブリトンと海峡の南に住むブリトンの交通を遮断し、

西サクソンの西進を可能にした。

彼の死後、王位はキオル (Ceol) (在位 592-597) であった。『Anglo-Saxon Chronicle』では、591年に彼の治世が始まり、翌年にキーウリン王を追放し、この王の息子 Cuthwine への王位の継承を拒否した。Ceolの死後、彼の兄弟のキオルウルフ (Ceolwulf) (在位 597年-611年)、そして彼の息子キネギルジ (Cynegils) (在位 611年-643年) がそれぞれ王位を継承した。キネギルジの系図上の位置づけは定まっていない。彼については、時には Ceol の息子、時には Ceolwulf の息子、時には Cuthwine の息子などと資料によって記録が異なっている。『Anglo-Saxon Chronicle』では Ceol の息子としている。また、それによると、626年にキネギルジ王ではなく、キウケルム (Cwichelm) 王がノーザンブリア王エドゥインの暗殺を支持したとある。西サクソン王国は共同統治されていたのであろうか。2人はエドゥイン王に従属したと思われる。また、その後、2人はノーザンブリア王国のオズワルド王に従って、キリスト教に改宗した。この改宗はマーシャ王国ペンダ王に対する連合であったと思われる。オズワルド王は、キネギルジ王の娘 Cyneburg と結婚した。彼の後継者は、ケンウォルフ (ケンウェルフ) (Cenwulf あるいは Cenwealh) (在位 643年-645年および 648-674年) であった。648年に、それから逃れるために東アングリア王国に逃亡した。そこでキリスト教に改宗した。ペンダ王の死後、西サクソンに戻ったが、ペンダ王の後継者ウルフヘレ王に攻撃されたが、サマーセットにその領土を拡張した。彼は、マーシャ王国に圧されながらも南に領土を拡張し、ウィンチェスターに新たな司教管区を建設した。彼の死後、彼の妻 (Seaxburh) が1年間王位を保ち、その後、その王位は、キーウリンの兄弟の子孫アスクウィン (Æscwine) (在位 674年-676年) によって継承された。ペーダによると、西サクソン王国は分割統治されて、アスクウィンは共同統治者であった。彼の後継者は、『Anglo-Saxon Chronicle』によると、キネギルジ王の息子でケンウォルフ (ケンウェルフ) の兄弟のセントウィン (Centwine) (在位 676年-685年) であった。ペーダは、彼も共同統治者の一人にしている。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、彼は、ブリトン人を海の方に押し遣ったとある。どのような戦いをしたかは分からない。彼は、王位を退き、修道僧になった。

彼の後継者は、カズワラ (Cædwalla) (在位 685年?-688年) であった。彼は、『Anglo-Saxon Chronicle』によると、キーウリン (Ceawlin) 王を通じて、Cerdic の子孫とされている。彼は、ブリティッシュ名は Cadwallon であるので、彼の系図は注意深く取り扱う必要がある。ペーダによると、彼は、分割統治されていた西サクソン王国を取りまとめた王である。彼は、王位につく前には、セントウィン (Centwine) と競争関係にあったと思われる。彼は、即位後、最初にサセックスを攻撃し、次にワイ島 (このときまだ独立した王国であったと思われる) を征服し、その島にサクソン人を住まわせた。ワイ島の王 Arwald は逃亡したが、ハンプシャーの Stoneham で発見され、カズワラの命令で殺害された。また、彼は、サリーを支配し、ケントを侵攻し、ケント王国の王 Eadric に代えて、彼の兄弟ムル (Mul) をその王に就けたが、ケントの反乱で Mul は殺害された。カズワラ王がケントを荒らし、自らその国を治めた。カズワラ王は、ワイ島を攻撃する時に負傷した。この怪我のために王を退き、ローマ巡礼をし、ローマ教皇セルギウス1世 (Pope Sergius I) (在位 687年-701年) から洗礼を受けた。彼の後継者は、イネ (Ine) (在位 688年-726年) であり、長期にわたって治めた。彼は、キーウリン (Ceawlin) 王を通じて、Cerdic の子孫とされている。彼は、ケント王ウィットレズ王 (King Witred) (在位 690年-725年) と和平条約を交わし、ケント王国は西サクソン王国から独立していた。サクソン王国との関係であるが、彼が退位する頃には、南サクソン (サセックス) 王国も西サクソンから独立していたと思われる。8世紀にはマーシャ王国が南アングロ・サクソンにおいて覇権を持っていた。マーシャ王国がグロスターシャー及びオクスフォードシャーを征服したため、西サクソン王国は、南と西に進み、その中心地域をハンプシャー、ウィルトシャー、バークシャー、ドーゼットおよびサマーセットとした。

彼の後継者は、彼の義理兄弟アシルハーズ (Æthelheard) (在位 726年-740年) であった。彼は、Cerdic の子孫ではなかった。イネ王がローマ巡礼に出たとき、王の候補者としてキーウリン王の子孫のオズワルドもいたが、マーシャ王国からの支持を受けていたアシルハーズは王位に就いた。彼はその後もマーシャ王国のアシルバルズ王に従属した。その後の王は、クースレズ (Cuthred) (在位 740年-756年)、ジゲバート (Sigeberht) (在位 756年-757年)、キネウルフ (Cynewulf) (在位 757年-786年) であった。この3人

の王に対しマーシャ王アシルバルズが大君主権を持っていた。クースレズ王は、アシルバルズ王にウェールズを攻撃するように強制され、彼の息子アシリング・キンリックを殺害された。ジゲバート王は、ハンブシャーの支配をマーシャ王アシルバルズによって与えられたが、不誠実な行動を取り、また、殺人のために非難され、アシルバルズ王の下で殺害された。キネウルフ王もアシルバルズ王の下で権力を掌握したが、アシルバルズ王が暗殺されると、彼は、758年頃、マーシャ王国からバークシャー (Berkshire) を奪い取った。しかし、779年にベンジングトンの戦い (Battle Of Bensington) でマーシャ王オファに惨敗し、バークシャーを奪い取られた。また、ロンドンもマーシャ王に奪い取られた。彼は、786年にウイトシャーのマートン (Marton) 村でシゲバート王の兄弟キネヘーズ (Cyneheard) によって暗殺された。次に、ベオルトリック (Beorhtric) (在位 786年-802年) が王位を継承した。彼はマーシャ王オファも傘の下で権力を持っていた。彼は、789年にオファ王の娘エズバーフ (Eadberh) と結婚した。彼の治世の時に、マーシャ王国の硬貨が使用されている。また、彼の治世のとき、789年にヴァオキングがポートランド島近くのドーゼット海岸に上陸し、その州知事を殺害している。796年にオファ王が死ぬと、ベオルトリック (Beorhtric) は自らウェセック王国を治めたと考えられる。しかし、マーシャ王国でコエンウルフ王が王位を継承し、ウェセック王国に対してオファ王との関係は、799年には復活していたと思われる。

エグバート (Egbert) (在位 802年-839年) が王位を継承した。彼は、825年の Ellandun の戦いでマーシャ王国の Beornwulf (在位) を敗北させ、イングランドの政治秩序を逆転させた。彼は、東アングリア王国と共謀して、サリー、サセックス、ケントおよびエセックスの支配をマーシャ王国から奪い取った。彼は、829年にマーシャ王国を征服し、その王 Wiglaf を追放し、ノーザンブリア王から大君主権の承認を得て、彼は、Bretwalda (imperium) になった。彼の後継は、アシルウルフ (Æthelwulf) (在位 839年-858年) であった。その後、彼の4人の息子がウェセック王国を統治した。835年からヴァイキングの襲撃が頻繁になり、851年にはテムズ川河口に現れ、マーシャ王 Beorhtwulf を敗北させ、デーン人はウェセックを侵攻した。これに対し、アシルウルフ (Æthelwulf) (在位 839年-856年) とエグバート王の息子は、Aclea の戦い (Battle of Aclea) でデーン人を打ち破った。その後、彼の4人の息子がウェセック王国を統治した。アシルバルズ (Æthelbald) (在位 856年-860年)、アシルバート (Æthelbert) (在位 860年-865年)、アシルレズ (Æthelred) (在位 865年-871年)、そしてアルフレズ大王 (Alfred the Great) (在位 871年-899年) が王位に就いた。彼の父がローマから戻ってきたとき、カロリング王朝のシャルル (Charele the Bald) (在位 840年-877年) の娘 Judith を第2の妻としていたので、彼より優位なフランク王国の王家に繋がる彼女の出現に焦ったアシルバルズは、アシルウルフ王の帰還を妨げる反乱に加わった。アシルウルフ王は、内戦を避けるために、アシルバルズをウェセック王に就け、その西を治めさせ、彼自身はその王国の東とケント王国とを治めた。アシルバルズ (Æthelbald) (在位 856年-860年) は、アシルウルフ王の死後、ウェセックス王国を治めた。アシルバルズ王は、父の未亡人 Judith と結婚したが、彼には子がいなかった。彼の死後、アシルバート (Æthelbert) (在位 860年-865年) がウェセック王国全体を継承した。次に、アシルレズ (Æthelred) (在位 865年-871年) が王位を継承した。彼がその王位に就いた年は、ヴァイキングの大部隊がイングランドを攻撃した年であった。このヴァイキングは、ノーザンブリア王国および東アングリア王国を破壊し、868年にマーシャ王国と戦った。マーシャ王ブルグレッズは、ウェセック王アシルレズに援軍を求めた。アシルレズ王とアルフレズ大王は、ノッティンガムに軍を向かわせ、ヴァイキングと戦ったが、決着がつかなかった。870年にはヴァイキングは予先をウェセック王国に向けた。ウェセックスとヴァイキングの戦いは、870年のエングルフィールドの戦い (Battle of Englefield)、871年1月のレディングの戦い (Battle of Reading)、アシュダウンの戦い (Battle of Ashdown)、ベアスイングの戦い (Battle of Basing)、そして3月のマートンの戦い (Battle of Marton) で展開された。この戦いでアシルレズ王は死亡した。彼の後は、アルフレッド大王 (Alfred the Great) (在位 871年-899年) が王位に就いた。アルフレッド大王の後継者は、エドワード (Edward the Elder) (在位 899年-924年) であった。彼は、デーン人とテテンホルの戦い (Battle of Tettenhall) に勝利した。これ以降、デーン人はハンバー川の南には入ってこなかった。エドワード王は、ハートフォード、ウイタム (Witham) およびブリングノース (Bridgnoth) などに要塞を築き、デーン人を湾に止めた。また、タムワース (Tamworth)、

いうのは、彼は、その王国のキネギルス (Cynegils) 王 (在位 611 年? -643 年) の洗礼式の立会人であり、この王の娘キネブルグ (Kyneburga) と結婚している。

オズワルド王は、ダル・リアダ王国で逃亡生活を送る中で、キリスト教徒になった。彼は、王位を継承した後は、その国内でのキリスト教の普及に努め、アイルランドからの修道士アイダーン (Aidan) (Saint Aida, あるいは、Saint Áedán) (651 年没) を招き、リンディスファーレン島を彼の監督管区として与え、キリスト教の普及を精力的に進めた国王であった。

642 年に、オズワルド王は、オズウエストリ (Oswestry)²⁸ において、マザーフィールドの戦い (Battle of Maserfield)²⁹ でマーシャ王国のペンダ王とブリトン王国の連合 (ポウイス王国などの連合) に惨敗し、殺害され、さらに、胴体、首、そして四肢をバラバラにされた。この戦争では、ペンダ王の兄弟エオワ (Eowa) (在位不明)³⁰ がオズワルド王側に付いて戦い、殺害されていたと考えられる。Eowa もマーシャ王国の王位に就いていて、共同統治していた

スタフォード (Stafford) およびウオーリックに要塞を築いた。彼は、デーン人によって支配されていた土地を奪い、ウェセックスの支配をマーシャ、東アングリアおよびエセックスに広げた。彼の姉妹アシルフラド (Æthelflæd) の死後、918 年にマーシャ王国を吸収した。また、918 年までには、ハンバー川南のデーン人は彼に従った。その後、スコットやウェールズも彼を君主と認めたと思われる。

イングランドを統一する最初の王は、アシルスタン (Æthelstan) (在位 924 あるいは 925 年-939 年) であった。エドワード王の死後、ダブリン王であったジトリック・カエク (Sihtric・Cáech) (927 年没) がヨーク王 (ノーザンブリア王国の南) になった。そして、彼は、ハンバー川南に侵攻しようとした。926 年にジトリックは、アシルスタン王と協議し、キリスト教を受入、彼の優位を認めて、アシルスタンの娘とタムワースで結婚したが、しかし、彼は、翌年、それを拒否したが、その後、直ぐに死亡した。その息子ゴフレッド (Gofraid) (934 年没) が継いだが、直ぐにアシルスタン王に追い出され、アシルスタン王がヨーク王になったと思われる。また、927 年 7 月 12 日のエモント (Eamont) の会議では、ノーザンブリア統治者であったエルズレズ (Ealdred)、スコットランド王コンスタンティン 2 世 (Constantine II) (在位 900 年-943 年)、ストラスクライド王オウエン (Owen) (937 年没?) は、彼の大君主権を認めた。その後、アシルスタン王は、ウェールズにも彼の権威を認めさせた。934 年にコンスタンティン 2 世はバッキンガムでアシルスタン王の大君主権を認めることに署名したが、937 年にゴフレッドの息子でダブリン王であったオラフ (Olaf Guthfrithson) (941 年没) およびストラスクライドのオウエンと共にアシルスタン王と戦ったが、大敗北した (Battle of Brunanburh)。このアシルスタン王の勝利で、彼のイングランドの統一が確定した瞬間であった。

²⁸ これは Oswald's tree という意味である。現在のシュロンブシャーにあり、当時、ここはポウイス王国の領地内であったと思われる。これは、オズワルド王が敵国まで攻め入ったことを示している。その戦争がオズワルド王の正義の戦争であったとは言い切れない。オズワルドが侵略したのかも知れない。

²⁹ この戦いの原因は不明である。633 年のハトフィールドの戦いでグウィネズ王国のカドワロン王にエドウィン王は殺害されたが、オズワルド王は 634 年のヘヴェンフィールドの戦いでカドワロン王を殺害し、ノーザンブリアの覇権を確立した。これに対しマーシャ王国のペンダ王は敵対した。この両者の覇権争いであったと思われる。あるいは、両者の領土拡張政策の衝突であったと思われる。ノーザンブリア王国の南下政策とマーシャ王国の北進政策の衝突であった。

³⁰ マーシャ王国のペンダ王の兄弟で、前王パイバ Pybba の息子であった。

のかもしれない。もし彼がオズワルド王の支配下にあったマーシャ王であったならば、この戦争でペンダ王が勝利したことによって、彼が全マーシャ王国の支配者になったことになる。もし Eowa 王が北マーシャ王国を支配し、ペンダ王が南マーシャ王国を支配していたならば、彼の勝利はマーシャ王国の南北の統一になる。

第12代目の王は、オズウィ (Oswiu あるいは Oswy) (在位 642年-670年) 王であった。彼は、エシルフリス王の息子であり、彼の父が616年のアイドル川の戦いで敗れ殺害されたとき、彼の他の2人の兄弟と共に外国に逃亡した。彼は、アイルランドの北部イー・ニエール (Nothern Uí Néill) 王国のケネル・ネオーガンに逃亡したと推測される³¹。いつノーザンブリアに戻ったかは不明であるが、兄オズワルド王が642年にマザーフィールドの戦いで敗れマーシャ王国のペンダ王に殺害された後に、彼は、ノーザンブリア王国の王位を継承した³²。

オズウィ王は、バルニシア王国の治世の前半(642年から655年まで)にマーシャ王国のペンダ王の支配の下で彼の力を伸張させたと考えられる。彼は、デイラ王国を手に入れるためにエドウィン王の娘エアンフレド (Eanfled) ³³ と結婚した。ノーザンブリア王国は、マーシャ王国のペンダ王の支配下にあり、バルニシア王国をオズウィが治め、デイラ王国をオズウィン (Oswine) ³⁴ (在位 644年?-651年) が治めた。651年にオズウィ王は、デイラ王国のオズウィン王を倒し、その代わりにオズワルド王の息子アシルワルド (Æthelwald) (在位 651年-655年) にその王国を引き継がせた。なぜアシルワルドがその国を引き継ぐようになったのかは不明である。それは、オズウィ王の意思なのか、あるいは、彼の意思に反しアシルワルド自身が強引に進めたのかは分からない。デイラ王国のオズウィン王の殺害によって、マーシャ王国のペンダ王とオズウィ王の関係が改善したのかも知れない。このことは、650年代に、オズウィ王の息子エルフリス (Ealhfrith) がペンダ王の娘キネブルフ (Cyneburh あるいは Kyneburga) と結婚し、一方では、彼の娘エルフレド (Ealhflæd) がペンダ王の息子ペアダ

³¹ 彼は、アイルランド語 (古アイルランド語) を話し、3人の妻の中で北部イー・ニエール (Nothernn Uí Néill) (ケネル・ネオーガン) 王国の王女フィン (Fín) を妻にしていた。このことから、彼の逃亡先は、アイルランドであろうと推測できる。

³² オズワルド王の息子にアシルワルド (Æthelwald) がいたが、このとき、彼は、まだ成人していなかった。よって、オズワルドの弟のオズウィがバルニシア王国の王位を継承した。

³³ オズウィ王の妻エアンフレド (Eanfled) には、2男2女の子がいた。その長男は、エクフリス (Ecgrith) (644 あるいは 645年-685年) で、オズウィ王の後継者であり、ノーザンブリア王国の王になった。彼は、ペンダ王の下に人質として預けられた。次男がアルフウィン (Ælfwine) (660年生-679年没) で、679年にマーシャ王国の王アシルレッド (Æthelred) (在位 675年-704年) との間のトレント川の戦い (Battle of Trent) で戦死した。その長女は、オスシリス (Osthryth) (697年没) で、マーシャ王国の王アシルレッド (Æthelred) と結婚した。その次女は、アルフレド (Ælfled) (654年生-714年没) であった。

³⁴ 彼は、デイラ王国の背教者 Osric (在位 633年-634年) 王の息子であった。

(Peada)³⁵ 王子と結婚していたことから推察できる。

マーシャ王国のペンダ王は、度々、ノーザンブリア王国からオズウィ王を追い出そうとした。655年にペンダ王はそのためにベルニシア王国を侵攻した。しかし、ウィンウエドの戦い (Battle of Winwæd)³⁶ でオズウィ王が予想に反して勝利した。ペンダ王は、30の部隊を従え、数ではオズウィ王の部隊を凌いでいたが、敗北し、東アングリア王国のアシルヘレ王 (King Æthelhere) (在位 654年) と彼の30の部隊長ともに殺害された。その敗因は、連隊を組んでいたグウィネッツ王国のキンフェッツウの息子カダファエル (Cadafael ap Cynfeddw) 王が部隊を引き返したこと、またオズワルドの息子でデイラ王国のアシルワルド王が戦闘から撤退したためであったと考えられる。なぜアシルワルドが彼の部隊を戦場から撤退させたのかは不明である。この戦いでの勝利でオズウィ王は、アングロ・サクソン王の帝王となった。彼は、彼の息子エルフリス (Ealhfrith) をデイラ王国の王に立てた。マーシャ王国の北をオズウィ王が治め、その南にはペアダ王 (King Peada) (在位不詳; 655年没) が立てられたが、彼の妻 (オズウィ王の娘) の黙認の下に毒殺され、マーシャ王国はオズウィ王の支配下に入った。さらに、東アングリア王国の王には、そのアシルヘレ王の兄弟のアシルウオルド (Æthelwold) (在位 654年?-664年) が就いた。また、オズウィ王は、660年代に、彼の息子エクフリス (Ecgrith) (644あるいは645年-685年) を東アングリア王国の王アンナ (Anna) (在位 630年代あるいは640年代初め-653年あるいは654年) の娘アシルフリス (Æthelthryth) (633年生?-679年没) と結婚させ、両王国の血縁を形成した。ケント王国の王のエオルセンバルト (Eorcenberht) (在位 640年-664年) とゼクスブルフ (Seaxburh)³⁷ 間の娘エオルメンヒルダ (Eormenhilda あるいは Ermenilda)³⁸ (700年あるいは703年没) とマーシャ王国の王ウルフヘレ (Wulfhere) (在位 650年?-675年) を結婚させた。オズウィ王は、このように王家間の血縁関係を強くし、帝王としての権勢を保とうとした。また、先に説明したように、オズウィの息子エルフリスはペンダ王の娘キネブルフ、彼の娘エルフレド (Ealhflœd) はペアダ王と結婚していた。

だが、オズウィ王の帝王としての地位は長続きしなかった。彼の支配は、3年程しか続かなかった。その第1の要因は、マーシャ王国のペアダ王をオズウィ王の娘エルフレド (Ealhflœd) の黙認の下で毒殺したことにあった。このことは、659年あるいは657年に起こった。そのため、

³⁵ 彼は、アイダンの死後、リンディスファーンの司教になったフィナン (Finan) (661年没) によって洗礼を受けた。

³⁶ この戦いの詳細は不明である。戦いはウィンウエド川 (River Winwæd) で行われたが、その川は特定されていないが、現在のリーズ (Leeds) 付近であろうと考えられている。戦闘は雨の降る中で進められた。死者は、剣による死ではなく、溺れ死にであった。

³⁷ 彼女も東アングリア王国アンナ (Anna) の娘であった。

³⁸ 彼女はイーリー (Ely) で女子大修道院長になった。

マーシャ王国³⁹で反乱がおこり、オズウィ王の支持者が排除され、マーシャ王国の支配者としてウルフヘレ (Wulfhere) (在位 650 年代?-675 年) が立てられた。戦争による解決ではなく、政治的決着でその危機が回避された。第2の要因は、第1の要因から誘発された、強力なマーシャ王ウルフヘレが誕生したことであった。マーシャ王国の王ウルフヘレは、オズウィ王の血族の者を司教に任命し、第1人者としてのオズウィ王を認める一方で、南ブリテンにおけるマーシャ王国の影響力とその権限を拡充した。東アングリア王国は、ウルフヘレ王が治めるマーシャ王国の支配下に入った。第3の要因は、オズウィ王はスコットランドとの戦いに戦力を充てすぎ、南(マーシャ王国)に対して手薄になったことである。オズウィ王は、670年に病気のため没した。ベルニシア王国の王位を Ecgrifith (在位 670年-685年) が受け継ぎ、デイラ王国ではアルフウィン (Ælfwine) (660年生-679年没) が王位を引き継いだ。オズウィ王は、ウィトビー修道院にエドウィン王と共に埋葬された。

第13代目の王は、エクプリス (Ecgrifith) (在位 670年-685年) であった。彼は、オズウィの息子であった。654年あるいは655年のマーシャ王国のペンダ王がノーザンブリア王国を侵攻するときには、彼は、マーシャ王国の王女キンウィジ (Cynwise) の宮廷で人質であったが、先に述べたように、660年に東アングリア王アンナ (Anna) の娘アシルシリスと結婚し、664年にデイラ王国の王に即位し、670年には彼の父の死によってノーザンブリア王国の王位を継承した。この王位継承後すぐに彼は、アシルシリスと離婚した。このことがヨーク大司教ウィルフリッド (Wilfrid) (在位 633年生?-709年没?) との論争の原因になった。そして、彼は、その大司教を彼の宮廷(王国)から追い出した。

彼は、671年あるいは672年の2つの川の戦い⁴⁰でピクトの反抗者を鎮め、ノーザンブリア王国の北部における15年間の安定をもたらした。674年には、マーシャ王国のウルフヘレ王

³⁹ マーシャ王国での反乱の指導者は、Immin, Eafa, および Eadbert であった。彼らは、ウルフヘレ (Wulfhere) を匿い、ケント王国の反乱が成功し、ウルフヘレ王が誕生した。

⁴⁰ この戦いについては、8世紀に活躍した修道士ステファン (Stephen of Ripon) (生没不詳) の『Vita Sancti Wilfrithi』から知られる。この書物は、聖書の人物と使徒パウロとウィルフリスの比較をし、ウィルフリスの聖性や善良さを記述したものであったが、彼の生涯を歴史的に記述している。それによると、その戦いは671年に起こっている。エクプリス (Ecgrifith) は、ピクト国 (Pictland あるいは Fortriu) によるその宗主権破棄の計画を知り、慌てて騎兵を集め、北に向かい、ロージアン (北ベルニシアを治めていたと思われる) の彼に従属するビオンハス王 (Beornhæth) (在位 671年-685年) の支援を得て、ピクト人のズレスト王 (Drest mac Domnaill) (677年没) (在位 662年-671年) と戦い、ピクト国を敗北させた。戦闘場所は不明であるが、歴史家によると、パースの近くで、Moncreiffe Island の近くである。負傷したピクト兵が2つの川を埋め尽くすほどであったと、ステファンは記述している。彼は、ノーザンブリアの騎兵の活躍を誇らしげに記述している。この戦いに敗れたピクト王国のズレスト王は退位し、ブリディ (Bridei mac Bili) (在位 671-693年) が Pict 王 (Fortriu 王) になった。

この戦争は、ノーザンブリアの宗主権あるいはその覇権の凋落を阻止するためのエクプリス王の挑戦であったと考えられる。

を破り⁴¹、ノーザンブリア王国はリンゼイ王国を支配した(数年後に、マーシャ王国はリンゼイ王国をアシルレッド (Æthelred) のもとで取り戻す)。しかし、679年にトレント川の戦いでマーシャ王国のアシルレッド (Æthelred) (在位 675年-704年)に敗れ、さらに、685年にダンニヘン (Dunnichen) の戦い⁴²でピクト王ブリィディ (ブルート) 3世 (Bridei III あるいは Bridei mac Beli)⁴³ (在位 671年-693年)に大敗した。この戦いでアングロ・サクソン軍は壊滅的な打撃を受けた。これによってノーザンブリア王国の北における勢力は弱められ、ノーザンブリア王国は、ピクト国の南部から追放された。その後、その治めていた領地は、ピクト族のマリー王国(あるいは Fortriu 王国)によって支配されたと思われる。この戦いでエクフリリスの死後、ノーザンブリア王国の衰退が始まったとベードはコメントしている。このとき、エクフリリスの死後に彼を後継する息子がいなかった。エクフリリスは、最初の妻アシルシリスとの間に2人の息子があつたが、アルフリリス (Alhfrith) は、彼が王位に就く前に既に死亡していたと思われ、また、アルフウィン (Ælfwine) は679年のトレント川の戦いで戦死していた。その死後の後継者選びが王国の問題であつた。

⁴¹ ウルフヘレの敗北によって、ウェセックス王国はマーシャ王国の圧政から解放された。翌675年にウェセックス王アスクウィン (Æscwine) (在位 674年-676年)の指揮する軍とのビーダンエフズの戦い (Battle of Biedanheafde) でウルフヘレは敗北したと思われる。その後、ウルフヘレは病没した。

⁴² この頃、ピクト王ブリィディは周辺国を攻撃し侵略した。例えば、果敢であつたブリィディ王は、680年あるいは681年に南部ピクトの領土内でストーンハベン (Stonehaven) の近くのダンオッター (Dunottar) 城を攻撃し、681年あるいは682年には、オークニ島を攻撃した。683年にはストラスアーンのダンダーン (Dundurn) を攻撃したと考えられる。この時期は、ノーザンブリアによる宗教改革の時期と重なる。ウィトビーの宗教会議 (664年) で、ローマ・カトリックへの信仰を誓い、ノーザンブリアの司教管区が分割され、多くの司教管区が創設された。その一つが、西ロージアンにあつたピクト司教 Twumwine の Abecorn である。また、復活日に関する論争ではローマ・カトリックの考えが取り入れられた。それまではノーザンブリアも聖コロンバ (Saint Columba) のアイオナの伝統の下にあつた。ブリィディ王は、アイオナの伝統に従っていたので、ノーザンブリアが支持するローマ・カトリック教会の侵入・浸食を嫌っていた。

⁴³ 『Historia Brittonum』によると、エクフリリス (Ecgrith) とピクト王 (上王 overking) ブリィディは、母方の従兄弟であつた。ブリィディの母がエドウィン王の娘であつた。エクフリリスの母は、エドウィン王の娘エアンフレド (Eanflæd) であつた。ピクト王ブリィディは、アルト・カルト王国の王ベリー (Beli) の息子であつた。上の脚注でも示したように、ブリィディ王は、果敢な王であり、680年あるいは681年にダンオッター (Dunottar) を攻撃し、681年あるいは682年にはオークニ島を攻撃し、683年にはストラスアーンの Dundurn を攻撃し、この動きは、宗主国 (ノーザンブリア) にとっては脅威であつた。その結果が、宗主権の誇示のためのピクト国への侵攻となり、685年のダンネフタン (Dun Nechtain あるいは Nechtsamer) の戦いとなつた。しかし、この戦いではエクフリリスなどのアングロ・サクソン軍は殲滅的な敗北をきした。エクフリリスはその戦いで殺害された。

この戦闘場所は不明である。ベードも地名を上げていない。"the straits of inaccessible mountais" とあるのみである。従来、その場所として、ファイフ湾の北側のピクト国の Forfar 近くの Dunnichen Moss であろうと考えられてきた。しかし、最近、新説が提示された。それによると、その場所は、バドノッホ (Badenoch) の Loch Insh 近くの Dunachton であろうという説である。

彼は、銀のペニー硬貨 (sceattas)⁴⁴ を発行した初期アングロ・サクソン王であった。この硬貨がその後のイングランドの主流になった。初期のアングロ・サクソンの国々では、殆ど硬貨は鋳造されていなく、最も普通の硬貨は、ローマの硬貨を模倣した金貨 gold shilling (thrymsas) であった。

第2節 ノーザンブリア王国の再統一とその凋落

2.1 ノーザンブリア王国の再統一

第14代目の王は、アルズフリスあるいはアルドフリス (Aldfrith あるいは Aldfrid)⁴⁵ (在位 685年-704年あるいは705年) であった。彼は、オズウィ王 (王位に就く前のオズウィ) と北部イー・ニエル (Nothern Uí Néill) (ケネル・ネオーガン) 王国の王女フィン (Fin) との間の子であったが、非嫡子であった。王位継承では対立候補がいたかも知れないが、対立候補者の記録は残っていない。彼は、教会で職業教育を受けた学識者であったので、エクフリスのような戦争好きな後継者を避けていた、アイルランド (イー・ニエル王国) やピクト王国から支持されたと思われる。彼によってノーザンブリア王国とウェセック王国の同盟がもたらされた。彼は、ウェセックス王イネ (King Ine) (在位 688年-726年) の娘コースブルフ (Cuthburh) と結婚した。アルズフリス王には、オズレッド (Osred) (697年生?-716年) とオフア (Offa) (750年没?) という息子がいたことが知られている。オズレッドは、後に、ノーザンブリア王国の王になった。

彼が王位を継承したときには、ノーザンブリア王国の国勢は衰えていた。実際、彼は、679年にマーシャ王国とのトレント川の戦いで失った中央イングランドおよびピクト王とのダンニヘン (ダンネフターン・ミア) の戦いで失った北部ブリティン地域の支配を取り戻すことは出来なかったが、それでも彼によって統一されたベルニシア王国⁴⁶ とデイラ王国⁴⁷ (ノーザンブリア王国) は、イングランドおよびアイルランドの中で最も力のある王国の1つであった。

彼は、ウェセックス国のシャーボーン (Sharborne) の司教アルデルム (Aldhelm)⁴⁸ (639

⁴⁴ この硬貨は、厚く、鋳型で形が取られていたが、多分、メロヴィング硬貨を模倣したものであったと思われる。この硬貨が大規模に発行されていた。

⁴⁵ 彼の誕生日は記録されていない。彼は、アイルランドの環境で育てられ、古アイルランド語を流暢に話した。彼の養育は、北部イー・ニエル (Nothern Uí Néill) のケネル・ネオーガンの血族が責任を負ったであろう。彼は、Cenn Fáelad mac Aillila (679年没) の従兄弟あるいは甥であり、リンデスファーレンの司教で、ここに大聖堂を創建したフィナン (Bishop Finan) (661年没) の甥であった。

⁴⁶ その中心は、ダンバー、リンデスファーレン、ヘクザム (Hexam)、バンバルク (Bamburgh)、イーベリング (Yeavinger)、コールデンガム (Coldingham)、メルローズ (Melrose) などであった。

⁴⁷ その中心は、ヨーク、カタリック (Catterick)、リボン (Ripon) およびウィットビー (Whitby) などであった。

⁴⁸ 彼もまたアイオナで教育を受けていた。彼とアルドフリス王との間に、文通がなされ、彼はその王に数秘

年生? -709年没)によって堅信礼(新教の洗礼のような儀式)をマルメズベリー(Malmesbury)で受けた。ノーザンプリア王国では、教会が大きな力を持っていた。リンディスファーレン司教管区は、アルズフリス王の許しでコースバートによって保有されていたが、後に、アイオナ修道院長になり復活祭の日付に関する論争を終わらせたエセバート(Easberht)(在位688年-698年)(698年没)に引き継がれ、そして、エズフリス(Eadfrith)(在位698年-721年)(721年没)によって保有された。この司教管区は、時々、ヘクザム(Hexham)司教管区によっても保有された。ヨーク司教管区は、685年にウィトビー修道院の修道女であったヒルダ(Hilda)(614年?-680年没)に教育されたボサ(Bosa)(705年没)によって保有され、687年にウィルフリッドに与えられたが、しかし、691年にヨークに戻ったボサ(Bosa)に移された。また、681年に、ロージアン(現在の西ロージアン)のアベルコーン(Abercorn)司教区は、カンタベリーのテオドール大司教(Theodore, Archbishop of Canterbury)⁴⁹(在位668年-690年)(602年生-690年没)によって任命された、ピクトの司教トルームウィン(Twrumwine)(生没年不明)に与えられた⁵⁰。最も重要な修道院はウィトビーにあり、そこにはデイヤ王国の家系のメンバーが、ヤーロー(Jarrow)やりポン(Ripon)で修道士になっていた。

教会が魂の権威であるのみならず、広大な土地を所有し、取引を支配していた。また、取引は、都市や町のないところでは、教会や修道院において集中的に行われた。アルズフリス(アルドフリス)国王と教会の関係であるが、アルズフリス国王は、教会と指導的な聖職者を支援し⁵¹、アイオナ修道院長と一緒に教育を受けた聖アトムナーン(Adomnán)(627あるいは628年生-704年没)とも親しかった。アルズフリス国王は、684年のエクフリス国王の時代に遠征⁵²で連れて戻ってきたアイルランド捕虜の解放の件で、聖アトムナーンに2度会った。そして、その捕虜は解放された。聖アトムナーンは、アルズフリス国王に彼の論文(*De Locis Sanctis*)⁵³の複写を贈呈し、また、ヨークの大司教ウィルフリッド(Wilfrid)が追放先から戻ることを認めた。その国王とヨーク司教ウィルフリッドの関係は荒れていた。その

学(numerology)に関する論文を献呈している。

⁴⁹ 彼は、司教管区を分割し、かつ、その管区の数を増やす政策を実行した。これによって、ヘクザムの司教管区をリンディスファーレン司教管区から分離し、アベルコーンに新たに司教区をもうけた。

⁵⁰ この司教区は、エクフリス王の死後、西ロージアンがピクトに占領されたため、その教区は捨てられた。トルームウィンは、ウィトビー修道院に退いた。

⁵¹ 特に、異母兄妹のアルフラド(Aelflæd)(654年生-713年没)や高く尊敬されていたコースバート(Cuthbert)(634年生?-687年没)であった。

⁵² これは、エクフリス王のとき、ベルフトレド(Berhtred)(698年没)がアイルランドのゲルガ平原を略奪し、教会を破壊し、人質を取った事件であった。その動機は不明である。

⁵³ これは、聖地とアレクサンドリアやコンスタンティノーブルでの巡礼地を記述したものであった。

原因の一つは、多分、アルズフリス王がゲール教会に深く関係していたためであったろう。それ以上に、その原因は、ウィルフリッド司教がノーザンブリア司教管区を分割するというカンタベリーの大司教テオドールの配分政策に反対していたことにあったと考えられる。ウィルフリッド司教は、北部の教区を統合し、彼のヨーク司教区の権威を高めることを目指した。アルズフリス王は、ウィルフリッド司教をノーザンブリアから追放した。この司教はマーシャ王国のアシルレッド王 (King Æthelred) の庇護を受けた。そのアシルレッド王は、オスターフィールドの宗教会議でウィルフリッドがヨーク司教に戻ることを支持した。この会議では、ウィルフリッド司教がヨークに戻ることは認められなかった。マーシャに戻った彼は、司教達によって破門された。

アルズフリス王の治世は、平和であり⁵⁴、文化面ではノーザンブリア王国の黄金時代と言われている。Insular 芸術、リンディスファーンの使徒 (Lindisfarne Gospels), Codex Amiatinus, 財宝としては Ripon Jewel やクースバートの十字架の胸当てなどが知られている。

2.2 ノーザンブリア王国の混乱と凋落

第15代目の王は、エルズウルフ (Eardwulf あるいは Eadwulf) (在位 704 年-705 年) であった。アルズフリス王の息子オズレッドが幼少であったために、彼の王位継承権は略奪されたと思われる。エルズウルフが Ida 王に繋がるかどうかは分からない。彼は、ベルニシアの北の国境であったロージアンを治めていたバートフリス (Berhtfrith) の支持を得たが、司教ウィルフリッドの帰国を巡りエルズウルフとバートフリスが仲違いし、結局、バートフリスが勝利し、エルズウルフはダル・リアダ王国かどこかに逃亡し、717 年に死亡した。

第16代目の王は、オズレッド 1 世 (Osred I) (在位 705 年-716 年) で、アルズフリス王の息子であった。彼の治世は、ヨーク司教ウィルフリッドによって支配されていた。ロージアンを治めていたバートフリスが彼を支援したと思われる。彼は、聖職者の資料では、放埒で墮落していて、修道女を誘惑する人物として記録されている。彼は、言葉が荒く、行動的であり、力があり大胆な人物であった。ベーダは、彼を Josiah のようであると記録している。彼は、国王としての力量を見せる前に暗殺された。誰が暗殺したのかは分からない⁵⁵。

第17代目の王は、コエンレッド (Coenred) (在位 716 年-718 年) であった。彼は、ベルニシアのイダの息子オグ (Ocg) の子孫で、その子孫 (Leodwaldings) の中でノーザンブリア

⁵⁴ 記録によると、彼の治世の時代に、698 年あるいは 697 年にピクト人との戦闘がアイルランド資料に報告されている。この戦闘でベルフトレッド (Berhtred) (698 年没) が死亡していることは伝えられているが、戦闘の場所は不明である。

⁵⁵ 『Anglo-Saxon Chronicle』によると、ボーダーの人に殺されたとある。ピクト王国の人か、あるいは、ロージアンを治めて従属していた王バートフリスかも知れない。

ア王になった最初の人物であった。彼が、オズレッド 1 世を暗殺したかも知れない。彼は、オズレッド 1 世と同じような性格であった。彼は、言葉が荒く、行動的であり、力があり大胆な人物であった。第 18 代目の王は、オズリック (Osric) (在位 716 年-729 年) であった。彼は、オズレッズ 1 世の兄弟 (異母兄弟) であったが、彼については殆ど知られていない。ベエグは、彼が狂い死にしたと記録している。第 19 代目の王は、ケオルウルフ (Ceolwulf) (在位 729 年-737 年)⁵⁶ で、コエンレッド (Coenred) 王の兄弟で、Leodwaldings のメンバーで 2 番目にノーザンブリア王になった人物であった。彼の治世についてもよく分からない。彼は、737 年に王位を退き、修道院に入った。ベエグは彼を栄光ある王としている。何故かはよく分からないが、修道院に入ったことと関係していると思われる。

第 20 代目の王は、エズバート (Eadberht) (在位 737 あるいは 738 年-758 年) であった。ケオルウルフ王が退位しリンディスファーレンで修道院に入ったときに、エズバートが国王になった。エズバース王の家系とライバル関係にあった家系には、まず初めに、第 15 代のエルズウルフ王の家系で彼の息子エルズウィン (Eardwine) が 740 年に殺害された。次に、第 14 代目のアルズフリス王の家系で彼の息子オフア (Offa) は、エドバート王の命令でリンディスファーレンから連れ出され殺害された。このとき、オフアを支持していたキネウルフ (Cynewulf) 司教は、廃位され、ヨークに監禁された⁵⁷。エズバート王の治世で特記すべきことは、ノーザンブリア王国の硬貨に改革をもたらしたことであった。また、彼は、近隣の王国との関係では、ノーザンブリア王国の支配権の再生に努力した。そのために 740 年にピクト国のオエンガス 1 世 (Óengus I) (在位 732 年-761 年) と戦った記録がある。戦いの原因・理由は不明である⁵⁸。この戦いでノーザンブリアを離れている間に、マーシャ王国のアシルバルド王 (Æthelbald)⁵⁹ (在位 716 年-757 年) がヨークを燃やした。また、750 年にはアルト・カルト王国から Kyle を奪い、そして 756 年には、彼はオエンガス 1 世と同盟を結び、ストラスクラ

⁵⁶ 731 年あるいは 732 年のある時期、彼は王を退いたが、直ぐに復位している。

⁵⁷ ノーザンブリアでの政治的争いでは、宗教的基盤と王家の争いが連結していた。エルドウィンの家系は Ripon に関係し、オフアの家系はリンディスファーレンに関係し、ヘクザンはリンディスファーレンに反対する王家や貴族に関係していた。しかし、エドバースの家系は、ヨーク大司教を兄弟 (エクバース Ecgberth) にする関係から、ヨーク最高の聖職者の支持を得た。

⁵⁸ 歴史家は、それはエルズウルフ王の家系で彼の息子エルズウィン (Eardwine) の殺害に関係しているという。ピクト国のオエンガス 1 世 (Óengus I) あるいはマーシャ王国のアシルバルド王 (Æthelbald) あるいは両者は、エルズウィンをノーザンブリア王に就けようと画策した。これに対しエズバートは戦いを仕掛けたのではないか。

⁵⁹ 彼の統治の間に、マーシャ王国のペンダ王やウルフヘレ王の勢力を回復した。ウェセック王国のイネ王 (King Ine) (在位 688 年-726 年) が 726 年にローマ巡礼のために退位し、ケント王国のウィトレッド王 (King Wihtrred) (在位 670 年?-725 年) が 725 年に死亡すると、彼がハンバー川以南で最も有力な王になった。彼のウェセック王国やケント王国に与えた影響については『Anglo-Saxon Chronicle』から得られる。

イドを侵略し、講和をむすび、しかし、9日後ゴーヴァンからノーザンブリアに引き返す時に彼の軍は破壊された。これは、マーシャ王国のアシルバルド王によってなされたのかも知れない。彼とオエンガス1世の軍は敗北したと思われる。彼は、757年に退位し、ヨーク大聖堂付の修道院に入った。

第21代目の王は、オズウルフ (Oswulf) (在位758年-759年)で、彼の在位期間は1年であった。彼は、召使いあるいは身辺警護者に暗殺された。彼の兄弟のオズウィン (Oswine) は、第22代目のアシルワルド王 (King Æthelwald Moll) (在位759年-765年)に暗殺された。また、アシルワルドは、オズウルフ王の暗殺にも関与し、ノーザンブリア王家の関係者であったかどうかは不明である。実際、彼は、ノーザンブリア王の系図には入れられていなく、ベルニシア王家の系統ではないであろう。また、彼がデイラ王国のアル (Ælle) の子孫であるかどうかも分からない。彼は、エズバート王とヨーク大司教エクバース (Ecgberth) によって修道院を与えられた貴族 (partician) の Moll であった⁶⁰。もしそうであれば、彼は、大逆罪を犯し、王位を認められたことになる。彼は、765年に退位しているが、それを決定したのは貴族と聖職者の会議 (Witenagement) であり、『Annals of Tigernach』によると、彼は、無理矢理に剃髪させられ、修道士にされた。このことから王の選出にもこの会議が関係していたと推測することもできる。

第23代目の王は、アルフレッド (Alhred) (在位765年-774年)で、王家の娘 (エズバート王の娘あるいはオズウルフの娘) との結婚によってヨーク大司教エクバースの関係者になった。彼は、彼の息子を通じて、ベルニシア王家のイダ王に関係すると系図では示されている。『Symeon Durham』によると、彼は、774年に、ピクト王国のキニオズ (Ciniod)⁶¹ (在位763年-775年)の宮廷に逃亡した。第24代目の王は、アシルレッド1世 (Æthelred I) (在位774年-779年)で、アシルワルド王の息子であった。王位を継承したとき、彼は幼かったと思われる。実際の政治は父親のアシルワルドによった執行されていたと思われる。彼は、779年の退位後に逃亡したと思われる。第26代目のオズレッド2世 (Osred II) (在位789年-790年)が強制的に剃髪させられ、退位させられた後に、アシルレッドは王位に復帰している。彼の命令によって、791年に、第25代目のアルフワルド1世 (Ælfwald I)⁶² (在位778年-788年)の2人の息子 (Ælf と Ælfwine) が溺死させられた。また、彼は、翌年の792年には、

⁶⁰ 与えられた修道院は、ヨーク州にある Stonegrave, Coxwold, 及び Donaemuthe の修道院で、Moll の兄弟フォースレッド (Forthred) に帰属した。

⁶¹ 彼の父 Feradach は、736年にピクト王国の王であったオエンガス1世 (Óengus mac Fergusa) (在位732年-761年)に捕らえられ、鎖に繋がれた。彼の父は、ダル・リアダ王国の王セルバツハ・マック・フェルハイル (Selbach mac Ferchair) (在位700年-723年)の息子であった。

⁶² 彼の父親は、21代目の王オズウルフ王であった。彼は、貴族の Sicga によって暗殺された。

逃亡先のマン島から戻ったオズレッド 2 世をすかさず捕らえ殺害し、アシルレッド 1 世 (Æthelred I) (在位 788 年? -796 年) は第 27 代目の王に就いていた。アシルレッド 1 世は、デイラ王国の強力な支援者か、あるいは、シャルルマーニュの支援を背後に持っていたのかも知れない。しかし、彼は、796 年に、エルダレッド (Ealdred) とワダ (Wada) の両貴族に指揮された陰謀者グループによって暗殺された。

第 28 代目の王は、オズバルド (Osbaldo)⁶³ (在位 796) であった。彼は、ノーザンブリア王国が次第に無政府状態になったときに、その王になったが、貴族と聖職者の会議で退位を強制される前に、即位後 27 日でリンディファーンに逃亡した。そして、ピクト王国に逃れ、コンスタンティヌス 1 世の保護を得た。ヨーク出身のアルキン (Alcuin) (730 年代あるいは 740 年代生 -804 年没) 修道士が彼の友達であった。アルキンは、793 年の彼の 2 通の手紙で、彼の貪欲な行動、贅沢な服装、異教徒の髪型を批判している。また、彼がリンディスファーンに逃れたときに、アルキンは、その地で修道士になることを勧める手紙を書いている。

第 29 代目の王は、エズウルフ (Eardwulf)⁶⁴ (在位 796 年 -806 年) であった。彼の家系図、彼の妻の名前、および死亡年は記録がなく、不明である。彼の父親も Eardwulf であり、彼の家系は貴族で、dux (州知事) の資格が与えられた。第 30 代目の王は、アルフワルド 2 世 (Ælfwald II) (在位 806 年 -808 年) であった。彼の治世は 2 年間であった。彼の治世に関して書かれた資料は殆どないが、彼の治世下で鑄造された硬貨は相当の量で発見されている。ヨークで鑄造され、製造者はクースハーズ (Cuthheard) である。

第 31 代目の王は、エンレッド (Eanred) (在位 810 年 -840 年)⁶⁵ で、エズウルフ王の息子であった。フランク王国の資料によると、エズウルフ王はシャルルマーニュのもとに逃れ、彼とローマ教皇によってノーザンブリア王に復位させられたと記録されている。このエズウルフが第 29 代目の王であったかどうかは不明である。多分、別名のエズウルフかもしれないと考えられている。彼の治世でそれまでの sceat 硬貨から styca 硬貨になった。この styca 硬貨は、銀が少なく真鍮で、ヨークで鑄造され大量に残っている。製造者は数人いたと思われる。これらは、外国との貿易で使用され、国内での取引には殆ど使用されていない。だが、税金はこの硬貨で納められたらしい。第 32 代目の王は、アシルレッド 2 世 (Æthelred) (在

⁶³ 彼は、暗殺者であったのかも知れない。780 年にアルフワルド王の息子 Bearn を北ヨークシャーのシルトン (Silton) で焼き殺した。

⁶⁴ 歴史家によると、彼の家系は、Eadberht 王に暗殺された、第 15 代の王エズウルフの息子エズウィン (Eardwine) を祖先に持つ。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、彼は、戴冠するときに、ヨーク大司教エンバルド (Eanbald) と他の 3 人の司教によって、ヨークミンスターで洗礼を受けた。

⁶⁵ 実際、エンレッドの在位期間については異論がある。発見される硬貨には、850 年と日付の入れられている硬貨が発見されている。エンレッド王の治世の開始された年はいつであったのであろうか。疑問として残される。

位?)である。彼の在位期間は確定しない。最近の研究では、彼の治世の始まりは、854年頃(以前には844年頃)ではないかとしている。彼は、862年頃(以前には849年頃)に暗殺されている。彼は、エンレッド王の息子であった。彼の王位は、一度、レッドウルフ(Roedwulf)に剽奪されたが、レッドウルフがヴァイキング⁶⁶と戦い殺害されたので、彼は復位した。彼の治世下でも父親の時と同じように真鍮(銀が少ない亜鉛の多量に含む)硬貨が大量に流通していたと思われる。これも多くの製造者によってヨークで製造された。

第3節 ノーザンブリア王国とヴァイキングの侵攻

3.1 ヴァイキングのヨーク侵攻

第33代目の王は、オズバート(Osbert)(在位848あるいは849年-862年)である。彼の治世の開始年は848年頃と一般に言われているが、その在位期間には異説もある。彼の血筋および直接の先祖は不明であるが、彼は、アシルレッド2世が暗殺された後にその王になった。866年の夏には、ヴァイキングがノーザンブリア王国を侵入し、866年11月にノーザンブリア王国の首都であったヨークを略奪した。オズバート王は、次のアラ王と共にヴァイキングに対して激しく戦うが、867年3月21日に殺害された⁶⁷。第34代目の王は、アラ王(King

⁶⁶ ヴァイキングによるノーザンブリア王国への侵攻は、8世紀後半から始まり、11世まで続いた。ヴァイキングの侵攻によってノーザンブリア王国は、分裂を強いられ、その勢力は衰退した。ヴァイキングは、最初、主に散発的に修道院を襲撃した。793年6月8日にリンディスファーレンの修道院、795年と802年にはアイオナの修道院、795年にはアイルランドのラースリン島、また786年から806年にはウェセックのポートランドがそれぞれ襲撃された。9世紀の前半を過ぎると、ヴァイキングの襲撃の回数および規模も増加し、そして定住するヴァイキングも現れた。アイルランドのダブリン王国がその典型であった。

⁶⁷ 『Anglo-Saxon Chronicle』には、そこで(ヨークで)両王(オズバートとアラの両王)が殺害されたことが記されている。また、『Historia Regum Anglorum』には、両王がヴァイキングと激しく戦い、殺害されたことが記され、逃れた者達はデーン人と和平を結んだとある。ノーザンブリア王国に攻めてきたヴァイキングの指導者の名前として、『Historia de Sancto Cuthberto』には、アルフダン(HalfdeneあるいはHalfdan Ragnarsson)(877年没)、イヴァール(ÍmarあるいはIvar Ragnarsson)(873年没)、ウバ(HubbaあるいはUbbe Ragnarsson)(878年没)などが挙げられている。この3人のそれぞれは、ラグナー物語の主人公ラグナー(Ragnar Lodbrock)の息子で、“The Great Heathen Army”のヴァイキングの首領(棟梁)であった。彼らは865年にイングランドの東アングリアに上陸した。866年にヨークに侵攻したのはイヴァールであった。彼は、869年に、マーシャを横切って東アングリア王国を侵攻し、異教徒の家臣になることを拒んだエドモンド王を鞭で打ち、体に矢を打ち込み、その首を落として、殺害し、その土地を略奪した。彼は、彼の兄弟に、“The Great Heathen Army”およびイングランドのデーン人の支配を任せ、アイルランドのダブリンに移った。もしかして彼は、ダブリンを本拠地としていたのかもしれない。彼は、イヴァール王朝の創始者であったと思われる。この王朝は、9世紀半ばから10世紀にわたってノーザンブリアのヨークを首都として、またダブリン王国からアイリッシュ海(Irish Sea)を支配した。また、11世紀から13世紀に亘ってマン島やヘブリディーズの島々を支配したGodfred Crovan王朝の祖先であった。

長兄のアルフダンは、871年にウェセック王国のアルフレッド大王と戦い、レディングを奪取したが、871

Aella) (在位 865 年? -867 年)であった。彼も、ヴァイキングと戦ったが、負け、オズバートと共に 867 年 3 月 21 日に殺害された。ヴァイキングの伝説的な英雄ラグナー (Ragnar) の息子に関するサガによると、彼の息子がヨークを略奪したのは、彼らの父親 Ragnar をアラ王が蛇穴に落とし殺害したことに対する復讐であると語られている。イヴァール (Ivarr あるいは Ímar) は、アラ王の背中に殺人鷲を掘って、その王を殺害したとそれには記録されている。

第 35 代目の王は、エグバート 1 世 (Ecgbert I) (873 年没) であった。彼は、先に示したようにオズバート王とアラ王の両王をヴァイキングが激しく戦って 867 年 3 月 21 日に殺害した後に、ヴァイキングによって王に任命され、そこを 6 年間治めた。彼は、ヴァイキングの支配下にあり、ヴァイキングのために徴税の任務を担ったと思われる。後には、彼は、ヨーク大司教ウルフヘレ (Wulfhere) (在位 854 年-896 年) と共に、ノーザンブリア王国からマーシャ王国に逃亡した (あるいは追放された)。

3.2 ノーザンブリアの分割とヨーク王国の成立：ヴァイキングの支配とウェセックス王国の影響

第 36 代目の王は、リクジグ (Ricsige) (在位 873 年-876 年) であった。彼は、フォース湾とティーズ川の間地域 (バルニシア) を支配した。彼の治世の後半には、バルニシアを彼が治め、旧デイラ王国の地域は、ヴァイキングによって支配されたと思われる。そのヴァイキングの王国は、ヨーヴィック (Jórvík) と呼ばれた。このときのヨークの王は、ヴァイキングの最初の王アルフダン (Halfdene あるいは Halfdan Ragnarsson) (在位 875 年-877 年) であった。

第 37 代目の王は、エグバート 2 世 (Ecgbert II) (在位 876 年-878 年?) であった。彼は、ノーザンブリア王国を 2 年間ほど治めた。その後、彼は、タイン川 (River Tyne) から北のバルニシアを治めたと思われる。彼の治めた期間は明らかになっていない。他方、そのノーザンブリアの南 (かつてのデイラ王国の領域に対応する地域) は、初めヴァイキングのアルフダンによって治められた。しかし、彼がそこから逃げ出したため、王不在となった。この不在期間は不明であるが、次にその王に選任されたのが奴隷の身分から⁶⁸ 王 (第 38 代目の王) になったグースレッド (Guthred あるいは Guthfrith) (在位 883 年-895 年) であった。しか

年にアルフレッド大王に敗北した。しかし、その後もアルフレッド大王に敗北をおわせ、ロンドンを略奪し、彼は、871 年から 872 年の間、その支配者になった。また、875 年から 877 年の間、ヨーク王国の支配者になった。彼は人気がなくヨークを追放された。彼の後継者は、グースフリス (Guthfrith あるいは Guthfred) (895 年没) であった。

ウバは、878 年にイングランドの Combwich に上陸したが、キンウィッチの戦い (Battle of Cynwich) でサクソン人 (ディヴォンの Odda に指揮されたサクソン) のとっさの襲撃を被り、彼は殺害された。

⁶⁸ このことは、『History of the Church of Durham』に記されている。

し、彼がノーザンブリア全体を治めたかどうかは確認されていない。ピクト王国⁶⁹からの侵攻を砕くために、彼の下でノーザンブリア王国はヴァイキングと連帯したのかも知れない。彼の死後もヴァイキングの王がノーザンブリアを治めた。

ウェセック王国の王アシルレッド1世(Æthelred I) (在位 865年-871年)の息子アシルウォルズ(Æthelwold) (868年生?-902年没)がノーザンブリア王国の王(第39代目の王(在位 899年-902年))になったという記録がある。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、アルフレッド大王(Alfred) (在位 871年-899年)が死亡した後、その息子のエドワード(Edward the Elder) (在位 899年-924年)がウェセックス王国の王位を継承した。この継承に不満であったアシルウォルズは、エドワードに対抗したが、ウェセックス王国内では支持を得られず、ノーザンブリア王国に逃亡した。その彼をノーザンブリアのヴァイキングは、その王(ヨーク王)として受け入れた。彼は、ウェセック王エドワードと戦うように東アングリアのデーン人を焚きつけ、マーシャとウェセックスを攻撃させた。それに対し、エドワード王もデーンロー(Denelaw)を攻撃した。ケントの人々は、デーン人とホルムで戦った(Battle of Holme)が、アシルウォルズは、その戦いで死亡した。彼の死後、ノーザンブリアは、第40代目の王(共同統治王)エオウィルとアルフダン(Eowilと Halfdan) (在位 902年-910年)によって共同統治された。彼ら(ノーザンブリアのデーン人)は、910年のテテンホールの戦い(Battle of Tettenhall)⁷⁰でマーシャ王国とウェセック王国の連合軍を攻撃したが、敗北した。これ以降、ノーザンブリアは、ハンバー川の南には侵攻しなかった。しばらくの間は、ノーザンブリアは、ウェセックス王国の支配下にあったと思われる。

第41代目の王エズウルフ(Eadwulf) (在位?-913年)の死亡については『Annals of Ulster』と『Annals of Clonmacnoise』の913年に記されている。彼は、king of the Saxon of the Northとして、アイルランドの資料には記されている。彼の後継者は、第42代目の王エルズレッド(Ealdred) (在位 913-?)であったと思われる。しかし、彼は、914年(遅くとも918年)にその支配地をイヴァールの孫ラグナル(Ragnall)によって追われている。彼は、アルバ王コンスタンティン2世(Constantine II) (在位 900年-943年)の下に逃亡した。

⁶⁹ このときアルバ王国を治めていたのは、キリク(Giric) (在位 879年-889年)であったと考えられている。

⁷⁰ これは、マーシャとウェセックスの連合軍とノーザンブリアのヴァイキングとの戦いであった。ヴァイキングの指揮官は、エオウィルとアルフダンであり、連合軍の指揮官はウェセックスのエドワード1世であった。ヴァイキングは、前年のリンゼイへの連合軍の侵攻に対する報復として、デーンローの王達(エオウィルとアルフダン)は、艦隊を結集させ、シーヴァーン川を上り、マーシャ王国の心臓部にその軍を移動させ、デーンロー軍はマーシャを略奪し、貴重な品を奪った。エドワード王は、ケントで船団を集め、侵入者を包囲した。ヴァイキングはブリッジトン(Bridgeton)への道を塞がれ、戦闘状態に入った。ヴァイキングは、エドワードの罠にはまり、敗北した。エオウィルとアルフダンの2人は、この戦いで死亡した。

イヴァールの孫⁷¹ ラグナル (Ragnall) (ヨーク王在位 918 年-921 年) とその兄弟ジトリック・カエフ (Sihtric Cáech)⁷² のアイリッシュ海での活躍が 914 年に記録され、917 年には、彼らがアイルランドの王国のマンスター王国やレインスター王国を侵略したことが記録されている。彼らは一旦歴史から消えたイヴァール王家を復活させた。

918 年には、アルバ王国のコンスタンティン 2 世などとのコルブリッジでの戦い (Battle of Corbridge)⁷³ の後、第 43 代目の王ラグナルがノーザンブリア (ヨーク) を治めたと思われる。彼は、ノーザンブリア王を兼務し、既に、マン島を含むアイリッシュ海域を支配していた北ブリテンの大君主であった。このとき、ノーザンブリア王国の北 (ベルニシア) を誰が支配し治めていたかは判然としない。もしかしてアルバ王国に追われたエルズレッド (Ealdred) が治めていたのかも知れない。というのは、920 年にエドワード王を大君主にする会議に、また 927 年 7 月 12 日のエモント・ブリッジ (Eamont Bridge) の会議にも彼が参加していたので、彼が 918 年以降ノーザンブリアの北の部分治めたのかも知れない。

イヴァールの孫ラグナル (Ragnall) の後継者は、第 44 代目の王ジトリック・カーク (Sihtric Cáech) (在位 921 年-927 年) であった。彼は、キリスト教を受入れて、926 年にウェセックス王アシルスタン (Æthelstan) (在位 924 年-939 年) の娘と結婚した。これは、アシルスタン王がイングランド北部に影響力を持つために計画された政治的な動きであったが、翌年、彼はキリスト教とその結婚を破棄した。その年に彼は急死した。ジトリック・カークの死後に、イヴァールの孫ゴフレズ (Gofraid あるいは Gothrith) (在位 927 年) が第 45 代目のヨーク王を継承したが、しかし、6 ヶ月以内にアシルスタン王に彼は追放された。彼は、ダブリンに戻り、再びダブリン王に就いた。ウェセックス王アシルスタンはヨーク王になった⁷⁴。

⁷¹ イヴァール王朝を築いたイヴァールの孫の Ragnall (921 年没)、Sirtric (927 年没)、Gofraid (934 年没)、Ímar (904 年没)、Amlaíb (896 年没) は、多分、兄弟であった。

⁷² ジトリック・カークは、919 年にはダブリン王になっていた。彼は、アイルランドの上王 Niall Glundub (在位 916 年-919 年) と何回か戦い、919 年にダブリンの戦いでその王を殺害した。ラグナルの死亡後、彼は、ダブリン王をゴフレズに譲り、ヨーク王になった。

⁷³ この戦いは、ヴァイキングの将来、ならびにバンブルグの高官 (ealdorman) の将来を決める戦いであった。戦いは、イヴァールの孫ラグナル (Ragnall) とアルバ王国のコンスタンティン 2 世、バンブルグの高官エルレッズおよびストラスクライドのドムナル 2 世あるいはドナルド 2 世 (Domnal II, Donald II あるいは Dyfnwal II) (在位 916 年-934 年) の連合軍との間でおこった。イングランド軍はヴァイキング側に付いた。『Annals of Ulster』によると、連合軍は最初優勢であったが、丘の陰に隠れていたラグナル軍の待ち伏せに遭った。勝負は決しなかったが、ラグナルはヨークに下って、その都市を奪い、そしてその王を宣言した。ベルニシアも彼の支配下にあった。

⁷⁴ 937 年にブルナンバラの戦い (Battle of Brunanburh) で、ダブリン王国のゴフレズの息子のアヴラフ、アルバ王国のコンスタンティン 2 世王およびストラスクライド王国のオーエン王の連合軍は、ウェセックス王国のアシルスタン王とエドマンド 1 世を攻撃したが、敗北した。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、連合軍の 7 人の若い王と連合軍の貴族 (高官, earl) およびコンスタンティン 2 世の若すぎる息子の死が記

この王が第46代目の王(在位927年-939年)であった。939年にアシルスタン王が死ぬと、彼の息子エドモンド王(Edmund I)(在位939年-946年)は、ダブリン王国のデーン人に攻められてヨークを失った。ダブリンを支配していたゴフレズの息子のアヴラブ(Amlaib mac Gofraid)がブリテンに渡り、第47代目のヨーク王アヴラブ(在位939年-941年)が誕生した。彼は2年間ヨークを治め死亡した。彼の死亡後、ジトリック・カークの息子アヴラブ・クアラン(Amlaib CuaránあるいはOlaf Sihtricsson)(在位942年-944年)がヨーク大司教ウルフスタン(在位931年-956年?)によってヨーク王⁷⁵に迎えられた。彼は、ゴフレズの息子ラグナル(Ragnall mac Gofraid)(943年没)と共にヨーク王国を共同統治したかも知れない。944年にウェセック王国のエドモンド1世に彼らは征服された。アヴラブ・クアランはダブリンに戻ったが、ラグナルは殺された。彼の死後、ウェセック王エドモンド1世(在位939年-946年)がヨークを奪い返した⁷⁶。彼が第48代目のヨーク王(在位944年-946年)であった。ウェセック王国の王位は、エドモンド1世の兄弟エズレズ(Eadred)(在位946年-955年)によって継がれた。

彼は、第49代目のノーザンブリア王になり、ヨークを支配した。ウルフスタンおよびノーザンブリアの議員と共にタンシヘルフ(Tanshelf)で会議を持ち、彼らはエズレズ王に従うことを約束したが、彼は、947年にヨークの大司教ウルフスタン(Wulfstan)に指揮されたヨークの貴族達によってヨークを追放された。ウルフスタン大司教達は、オークニ王エリック・ブローダック(Erik Bloodaxe)を第50代目のその王として招聘した。しかし、948年にウェセック王エズレズは、ノーザンブリアに攻め入り、リボンミンスターを燃やした。彼は、キャスルフォードの戦いで大損失を被ったが、エリックを捨てない限りノーザンブリアを襲撃することを伝え、エリックをヨークから追放した。949年にノーザンブリアは、再び、ダブリンからジトリック・カークの息子アヴラブ・クアラン(Amlaib Cuarán)(在位949年-952年)を第51代目のその王として迎えた。この王位継承をウェセックス王エズレズも同意していた。

されている。その戦勝によってアシルスタン王のイングランドの統一が認められた。937年と939年の間に発布された王の勅許状には、“totius rex Britanniae”(Ruler over all Britain)と記されている。

⁷⁵ 『Anglo-Saxon Chronicle』には、941年にノーザンブリア人がアヴラブ・クアランを選んだことを記している。

⁷⁶ エドモンド1世は、942年にマーシャとデーンローの奪還のために反撃してきた。アヴラブ・クアランとウルフスタンは、マーシャの襲撃に成功し、レスターまで進んだが、そこでエドモンドに包囲され、命からがらに逃れた。エドモンドとの講和交渉では、エドモンドはノーザンブリアをアヴラブ・クアランに譲渡したが、しかし、944年にはエドモンド王は、アヴラブ・クアランを追放し、ノーザンブリアを支配下に治めた。945年にエドモンド王は、ストラスクライド(カンブリア)を襲撃し、ストラスクライド王オーエンの息子2人を盲目し、その統治をスコットランド王マルコム1世(Malcolm)(在位943年-954年)に託した。946年にエドモンド1世は、レオファ(Leofa)という人物に殺害された。

3.3 ウェセックスの支配, バンブルグの高官および王宮貴族

952年にアヴラブ・クアランは、エリック・ブローダックによってノーザンブリアから追放された。エリック(在位952年-954年)は、再度、第52代目の王に就いた。『Flores historiarum』によると、エリック・ブローダックは、ヨークを追放され、バンブルグの高官であったオズルフ(Osulf)によって暗殺された⁷⁷。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、エズレズ王がそこを支配した以降、ノーザンブリアは、独立した王国を維持することはなく、ウェセック王国の支配下に入り、ウェセック王によって任命されるバンブルグ(Bamburgh)の高官(earl; high-reeve)あるいはdux(州知事)すなわちealdorman(王宮貴族)⁷⁸によって治められた。ノーザンブリアの南と北の支配者(州知事あるいは王宮貴族)は、基本的に、それぞれ別人であった。

記録に残っている最初のその高官(earl)は、オズルフ(Osulf)(在位954年?-963年以前)であった。そのことを勅許状(charters)から知ることができる。彼の先祖については知られていないが、歴史家は、彼がノーザンブリアを治めていたエルズレッド(Ealdred)の息子あるいはエズウルフ(Eadwulf)あるいはエルズレッド(Ealdred)の親戚と考えている。彼は、エリック・ブローダックを殺害した。ウェセックス王エズレズがヨークを奪ったときには、オズルフがそこを治めたと考えられるが、全ノーザンブリアを治めたかどうかは不明である。『Anglo-Saxon Chronicle』には、エリック・ブローダックの後にはウェセックス王エズレズが第53代目のノーザンブリア王(支配者)に就いたとある。もしそうならば、オズルフは、エズレズ王の扇動の下にノーザンブリアを治めさせたのかも知れない、あるいは、エズレズ王の臣従王(sub-king)であったのかも知れない⁷⁹。彼の治世の実態については知られていない。彼の死は963年以前であったと思われる。

オズラック(Oslac)(在位963あるいは966年-975年)⁸⁰がヨークの最初の王宮貴族であったと見られるが、彼の先祖は不明である。オズルフの死後、ノーザンブリアは南北に分割された。ノーザンブリアの南は、ハンバー河口からティーズ川まで、その北⁸¹は、ティーズ川からフォース湾までの領域であった。彼は、ウェセックス王エドガー(Edgar the Peaceable)⁸²

⁷⁷ エリックを殺害したのは、『Flores historiarum』によると、マックス(Maccus)であった。

⁷⁸ 国王のために地方(州あるいはいくつかの州)を治めた宮廷貴族であった。

⁷⁹ 『De primo Saxonum adventu』には、オズルフがエズレズ王のもとで全ノーザンブリアの領土を治めたことと記録されている。

⁸⁰ 963年の勅許状に彼の名前が記されている。これからすると、オズルフの死亡した963年にオズラックがealdormanに就いたと考えることもできる。

⁸¹ 北はEadwulf(Eadulf)が治めた。

⁸² 彼は平和主義者ではなかったが、彼の統治時代は平和であった。彼は、973年に彼の妻(Ælthryth)と共に戴冠式を行った。この戴冠式は、エドガー王の絶好調の時期に行われ、女王も同時に戴冠した最初の式であった。

(在位 959年-975年)の勅許状に署名している。彼は、北のバンプルグの高官エズウルフ (Eadwulf) と共に、スコットランド王ケニス 2 世 (Kenneth II) (在位 971年-995年) をエドガー王の所 (チェスター) までエスコートしたと『De primo Saxonum adventu』に記録されている。『Chronicle of Merlose』によると、ケニス 2 世、ストラスクライド王のマルコム 1 世 (Malcolm) (在位 973年-997年)、マン島 (Isle of Man) および島々の王 (king of very many Ilands) であったマックス (Maccus あるいは Magnus)⁸³ (984年から 987年の間に没) などがチェスターに集まり、エドガー王と同盟を結んだ。スコットランド王ケニス 2 世がエドガー王の大君主権を認め、彼に臣従した。これに対して、エドガー王は、スコットランドにロージアン (現在のエディンバラ) を与えた。エドガー王は、スコットランドとイングランドの国境をその同盟で決めたと思われる。但し、正確な国境は不明である。975年にエドガー王が死ぬと、オズラックは、その理由は分からないが⁸⁴、その土地を奪われ、追放された。

オズラックの後継者は、セオレッズ (Thored) (在位 974年から 979年の間-992年から 994年の間) であった。彼は、オズラックのノーザンブリアからの追放の後に、ヨークの支配者になった。彼の王宮貴族としての治世は勅許状の証明から知られる。彼は、スカンジナビア人の系統に属していた⁸⁵と思われる。彼の先祖に関しては 2 説がある。一つは、ヨークの宮廷貴族オズラックの息子⁸⁶であり、他の説では、Gunnar という男の息子⁸⁷とされた。彼の治世で確実なことは、彼がヨークの大司教オズワルド (Oswald) (在位 971年-992年) と不仲であったということである。彼は、ウェセック王国 (およびイングランド王国) のアシルレッド 2 世 (Æthelred II) (在位 978年-1013年および 1014年-1016年) との関係は良好であった。

⁸³ 彼は、Harald の息子で、またアヴラブ・クアラン (Amlaib Cuarán) の甥であった。よって、彼は、イヴァール王朝の構成員であった。彼の父は、アイルランドのリマリックの王 (King of Limerick) であった Aralt mac Sitric (940年没) と同一人物であると理解されている。彼は、970年代から 980年代にかけてアイリッシュ海の周辺で活動した。971年にウェールズの Penmon (重要な教会があった地) を攻撃した。973年にアングルシー (Anglesey) 島を攻撃した。982年には、兄弟のゴフレズ (Gofraid) (989年没) と共にウェールズを攻撃している。984年には、マンスター王 Brian Bóruma およびウォターフォード王イヴァールと共にダブリンを攻撃している。これ以降、彼は、歴史上の資料から消えた。

⁸⁴ 一説では、彼が Edward the Martyr (在位 975年-978年) の王位の継承に反対したためである。

⁸⁵ 『Anglo-Saxon Chronicle』の 992年には、彼の資格を "Eorl" (Earl) と記されている。ハンプシャーの宮廷貴族は、Ealdorman と記録されている。ハンプシャーの Ealdorman Ælfric と記され、Earl Thored とある。

⁸⁶ 『Historia Eliensis』によると、オズラックには Thorth (Thored) という息子がいた。

⁸⁷ 『Anglo-Saxon Chronicle』には、966年に宮廷貴族 Gunnar の息子 Thored がウェストモールランドを襲撃したとある。この説ではこれがヨークの ealdorman の Thored であると考えている。この説が正しければ、彼がウェストモールランドを襲撃したのは、エドガー王によって奪われ、オズラックに与えられた父 Gunnar の土地を奪い返すためであったと解釈できる。

この王の最初の妻アルフジフ (Ælfgifu) はセオレッズの娘であった。このことは、セオレッズは王宮貴族ではなく、地方を治める王あるいは貴族であったことを意味するであろう。彼がヨークの宮廷貴族になったのは、彼の娘とその王との結婚以後か以前かは不明である。彼は、アシルレッズ 2 世の時代の勅許状に署名している。979 年に初めて現れ、さらに 983 年に 3 回、984 年に 1 回、985 年に 3 回、988 年に 1 回、そして 989 年に 1 回、彼はそれに署名している。この署名から推察するに、彼は、ヨークを治める貴族 (多分その王に従属する) であったと解釈できる。彼は、ヴァイキングとの戦い⁸⁸ で死んだのかも知れない、あるいは、その王を裏切り、スカンジナビア (デーン人の) 軍に寝返った⁸⁹ のかも知れない。

次に、アルフェルム (Ælfhelm) (在位 994 年-1006 年) がヨークの州知事 (王宮貴族) になった。彼の父親は知られていないが、彼は、マーシャの富裕な貴族婦人ウルフラン (Wulfrun) の息子であった。彼の死以外に彼の治世については知られていない。『Anglo-Saxon Chronicle』の 1006 年に彼が殺害され、彼の 2 人の息子も盲目にされていた⁹⁰ と記されている。何故、殺害され、盲目にされたのかは不明である。もしかしてヴァイキングの襲撃に関係があるのかも知れない。彼には、その後イングリランド王となったクヌート (Cnut) と結婚したアルフギフ (Ælfgifu) という娘がいた。彼女は、クヌート大王の最初の妻となり、イングリランド国王ハロルド・アレフット (Harold Harefoot)⁹¹ (在位 1035 年-1040 年) の母親になった。

⁸⁸ 991 年にスカンジナビア (ノルウェイ) 王の Olaf Tryggvasson (Oalf) (在位 995 年-1000 年) を指揮官とするヴァイキングがエセックスの Blackwater 川のそばの Maldon に上陸し、そこを襲撃した。これを阻止すためにエセックスの高官ビルトノース (Byrhtnoth) (在位) とその大臣がヴァイキングと戦った。しかし、ビルトノースは戦死し、ウェセックは敗北した。アシルレッズ王は、銀 3,300 kg の支払でヴァイキングを買収した。これが最初の Denegeld であった。また、993 年にヴァイキングは、バルニシアのバンブルグを襲撃し、次に、ハンバー川の河口に行き、リンゼイやノーザンブリアを略奪した。イングリランド軍が編成され、Fræna, Godwine および Frythegyst がヴァイキングと戦いを始めた。『Anglo-Saxon Chronicle』に記されている。この戦いの後、セオレッズは記録から消えている。

⁸⁹ これは、『Worcester Chronicle』による。これは、『Anglo-Saxon Chronicle』に Fræna, Godwine および Frythegyst 達が、デーン人であったため、デーン人と戦うことを避けたとある。この類推から、セオレッズがスカンジナビア人の血統と理解され、彼が寝返ったとされたのかも知れない。

⁹⁰ 『Worcester Chronicle』によると、彼を殺害し、彼の 2 人の息子 Wulfthaeh と Ufegeat を盲目にした人物はエズリック・ジトレオナ (Eadric Streona) (1017 年没?) であった。彼は、その後、アシルレッズ王によってマーシャの ealdorman に任命 (在位 1007 年-1017 年) されたが、1017 年にイングリランドとデーンの間を行き来していた彼の裏切りを恐れたクヌート王によって暗殺された。クヌートは、その暗殺をエリック・ラルシール (Eric of Hlathir) に託した。

⁹¹ 彼は、クヌート大王の死後、そのデンマーク王位の後継者であった。嫡子アルスクヌート (Harthcnut) は、デンマーク王 (クヌート 3 世) を継承したが、大王のイングリランド王の位を受け継がなかった。大王が死んだとき、ノルウェイ王マグナス 1 世 (Maguns I) (在位 1035 年-1047 年) およびスウェーデン王ヤコブ (Anund Jacob) (在位 1022 年-1050 年) がデンマークを侵攻する恐れがあったので、アルスクヌートは、デンマークを離れることができなかった。そこで、ハロルド・アレフット (Harold Harefoot) がイングリランド王位を継いだ。イングリランドの大臣達は、彼をアルスクヌートの摂政として、あるいは、その共

アルフェルムの後継者は、ウトレッズ (Uhtred) (在位 1006 年-1016 年) であった。彼は、全ノーザンバーランドの支配者になり、バンバルグの高官のウォルシオフ (Waltheof) (在位 994 年) の息子であった。1006 年にアルバ王国のマルコム 2 世 (Malcolm II) (在位 1005 年-1034 年) は、新たに建設された司教都市グラムを襲撃した。このとき、デーン人がイングランドの南を襲撃していたため、イングランドのアシルレッズ王 (King Æthelred) (在位 978 年-1016 年) は援軍を送ることができず、ヨークの支配者であった宮廷貴族アルフェルムは行動を起こさなかった。また、バンバルグのウォルシオフは、戦うには老いすぎていたため、バンバルグ城に引きこもったままであった。ウトレッズは、父のために行動を起こし、軍をベルニシアおよびノーザンブリアから召集し、マルコム 2 世と戦った。その結果は、ウトレッズの大勝利であった。この働きによって、彼の父はまだ生きていたが、彼は、アシルレッズ 2 世からバンバルグの高官を与えられた。一方、アシルレッズ王は、ヨークのアルフェルムを殺害させ、ヨークの ealdorman (王宮貴族) を彼に継承させた。これによってノーザンブリアの北と南を統合した。1013 年にデンマーク王であったジウィン (Sweyn)⁹² (イングランド王の在位期間は 1013 年-1014 年) がハンバーおよびトレント川を上がってゲインズバラ (Gainsborough) を侵攻した。彼は、ロンドンを支配し、1013 年のクリスマスに王として迎えられ、5 週間治めたが、ゲインズバラの近くで死亡した。イングランドから逃亡していたアシルレッズ 2 世は、ジウィン (Sweyn) の死後、イングランドに戻った。

スカンジナビアのイングランド侵攻軍は、1015 年の夏、サンドウィッチに何の抵抗もなく上陸した。クヌート軍は、ウェセックスに移動し、ドーゼット、ウイルトシャーおよびサマーセットで略奪を続けた。1016 年の初めには、略奪しながらテムズ川を上り、マーシャに移動

同統治者として彼の統治を認めた。マーシャの宮廷貴族レオフリック (Leofric, Earl of Merchia) (在位 1030 年?-1057 年) は、ハロルド・アレフットの王位継承に賛成したが、ウェセックスの宮廷貴族ゴッウィン (Godwin) やカンタベリー大司教アシルノット (Æthelnoth) (在位 1020 年-1038 年) は、彼の王位継承に反対した。しかし、1037 年にウェセックスの宮廷貴族ゴッドウィンは、立場を変えて、ハロルド・アレフットを支持した。アルスクヌートの母親エマは、Bruges、そしてフランドルに逃亡した。1037 年にハロルドは、イングランド全てで王として受け入れられた。

⁹² 彼のデンマーク王 (Sweyn 1 世) としての在位期間は、986 年あるいは 987 年から 1014 年であった。彼は、クヌート大王の父親であった。『Peterborough Chronicle』によると、ジウィン (Sweyn) は、1013 年の 8 月前に、息子のクヌートと共に艦隊でハンバー川河口に上陸し、トレント川 (River Trent) を上ってゲインズバラ (Gainsborough) に行った。ノーザンブリアのウトレッズは彼に服従した。同様に、リンゼイ及び Five Boroughs の人々も彼に従属した。彼は人質をとり、イングランドの南に進み、オックスフォード、さらにウィンチェスターに進んだ。そしてロンドンに進んだ。ロンドンでは国王のアシルレッズと Throkell the Tall (ヴァイキングの指導者の一人) が激しく抵抗した。ジウィン (Sweyn) はバースに行った。西の豪族 (thane) は彼に従属し、人質を差し出した。アシルレッズ王は、息子のエドワードとアルフレッドをノルマンディーに送り、ワイ島に退き、ノルマンディーに向かった。1013 年にジウィン (Sweyn) がイングランド王を宣言した。だが、彼は、ほんの 5 週間イングランドを治めた。

した。エドモンド王子(鉄のエドモンド王⁹³と呼ばれた)は、その侵攻を食い止めるために軍を指揮したが、失敗した。1016年にウトレッズがエドモンド王子とチェスターで戦っている最中に、クヌート(Cnut)(イングランド王の在位期間は1018年-1035年)とその軍は、ノーザンブリアに進み、ヨークシャーを侵攻した。力ではクヌートに及ばなかったウトレッズは、クヌートに臣従した。ウトレッズは、クヌート王に召集され、その地に向かう途中でスルランズ(Thurrand the Hold)(1024年没?)によって暗殺された⁹⁴。

ノーザンブリアの南は、エリック・ラルシール(Eric of Hlathir)(在位1016年-1023年)が継いだ。エリック・ラルシールは、クヌート王の傘下に入った。クヌート王は、エリック・ラルシールにヨークのealdorman(earl)を与え、クヌート軍は、南下し、再度、ロンドンに向かった。その軍がロンドンに到着する前に、アシルレッズ王は死亡し、エドモンド2世(Edmund II)(在位1016年4月-1016年11月)がその王位を継承した。エドモンド2世は、クヌートと協定を結び、イングランドを4つに分けて統治した。1016年にクヌートがイングランド王(在位1016年-1035年)になった。エリック・ラルシールは、ノーザンブリアを治めた。だが、彼は、1023年以降、イングランドの資料には登場しない。多分、彼は、クヌート王によって追放された⁹⁵のであろう。1033年から、ジワーズ(Siward)がノーザンブリアの南を治めたと思われる。

ノーザンブリアの北では、ウトレッズ(Uhtred)の後継者は、彼の兄弟エズウルフ2世(Eadwulf II Cudel)(在位1016年-1019年)であった。エズウルフ2世は、1018年にアルバ王国のマルコム2世(Malcolm II)(在位1005年-1034年)とのカラムの戦い(Battle of Carham)で大敗北した。これによって彼はロージアンを失った。エズウルフの後継者は、ウトレッズの息子のエルズレッズ(Ealdred)(在位1019年-1038年)であった。彼は、父の復讐としてスルランズ(Thurrand)を殺害した。その彼は、次には、スルランズの息子(Carl)に殺害された。エルズレッズの後継者は、エズウルフ3世(Eadwulf III)(在位1038年-1041年)であった。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、エズウルフ3世は、イングランド国王のアルスクヌート(Harthcnut)⁹⁶(在位1040年-1042年)に裏切られ、1041年にジワーズに殺害さ

⁹³ 彼は、イングランド王アシルレッド2世とアルフジフ(Æthelgifu)の間の3男であった。1016年にアシルレッド王が死亡すると、ロンドン市民と議会はエドモンドを王位に就ける予定であった。デーン人がロンドンを襲撃し、エドモンドはサマーセットのPensewoodおよびウィルトシャーのSherstonでデーン人とその支援者と戦った。彼はデーン人を敗北させ、クヌートをケントまで追いやったが、1016年10月18日のアサンダンの戦い(Battle of Assandun)でEadric Streonaが逃亡したために、クヌートに敗北した。その後間もなく、11月30日にエドモンドは死亡した。クヌートがイングランド王になった。

⁹⁴ その暗殺は、恐らく、クヌート王の支持によるものであったと思われる。

⁹⁵ 『Encomium Emmae』によると、エリック・ラルシールは、クヌート王によって首を斧で落とさせた。

⁹⁶ 彼は、クヌート大王とノルマンディーのエマの息子であった。クヌート大王が死んだとき、アルスクヌー

れた⁹⁷。

ジワーズあるいはジグルズ (Siward あるいは Sigurd) (在位 1041 年-1055 年)⁹⁸ は、バンバルグの王宮貴族のエルズレツズの娘アルフラツズ (Ælflæd) と結婚し、バンバルグの高官 (王宮貴族) への道を準備し、他方で、バンブルグの王宮貴族 (伯爵) であったエズウルフ 3 世を殺害した。これによって彼は、ノーザンブリア全体の統治者になり、1041 年から 1055 年までの間そこを治めた。彼は、ウェセック伯ゴッドウイン (Godwin, earl of Wessex) (1053 年没) およびマーシャ伯レオフリック (Leofric, Earl of Merchia) と共に告白王エドワード (Edward the Confessor) (在位 1042 年-1066 年) を支えた王宮貴族であった。1051 年にウェセック伯がエドワード王に反乱を起こしたとき、ジワーズとマーシャ伯レオフリックは、ウェセック伯と交戦し、エドワード王を護った。ジワーズは、ノーザンブリアの支配領域を南方に拡大し、1040 年代にはノーザンプトン (Northampton), 1050 年代にはハンディングダン (Huntingdon) を支配した。彼は、ストラスクライドに取られていたカンブリア (Cumberland) をも支配下に入れたと思われる。さらに、彼は、北方にもその領土を拡大した。1054 年にマクベス王 (在位 1040 年-1057 年) が治めていたスコットランド王国への大侵攻を実行した。『Annals of Ulster』によると、この戦いで、3,000 人のスコットランド人と 1,500 人のイングランド人が死亡した。ジワーズの息子 (Osborn) も死亡した。この戦いの結果、カンブリア王の王子マルコム (Malcolm III) がストラスクライド王国の王位を取り戻した。ジワーズは、スコットランドとの国境を変更しようとし、スコットランドを侵攻したと思われる。ストラスクライド王国は、多分、ノーザンブリアの支配下にあったと思われる。彼は、スコットランド侵攻後の 1055 年に死亡した。

彼の後継者は、ゴッドウインの息子トジグ (Tostig Godwinson) (在位 1055-1065) であった。彼は、ジワーズの死によって、ノーザンブリアの earl (王宮貴族 (伯爵)) になった。彼

トは、13 歳の子供であったので、異母姉弟のハロルド・アレフットがイングランド王を継承した。彼の死後、アルスクヌートがイングランド王位を継承した。彼は、宮廷貴族を信用していなかったため、独裁的な政治をした。それを可能にするように軍備 (艦隊) を増強し、増税を課した。彼は、合法的にはあったが、増税に反対する人々に懲罰を科した。ハロルドは、病弱であったので、1041 年にエドワード (Edward the Confessor) を亡命先のノルマンディーから王位継承のために招いた。彼は、結婚していない、彼には後継者がいなかった。1042 年に家臣の結婚式場でアルコールを飲んで急死した。

⁹⁷ エズウルフ 3 世は、理由は不明であるが、突然、アルスクヌート王を襲ったが、王とは和解した。彼に安全を保証したアルスクヌート王であったが、王は、ジワーズ (Siward) にエズウルフ 3 世を暗殺させた。これによって、古くから続いてきたバンバルグの earl (宮廷貴族) は、彼の代で途絶えた。ジワーズは、スカンジナビアンで、クヌート大王がイングランドを支配した後にイングランドに現れた軍人であった。また、彼は、クヌート大王、ハロルド・アレフット王、アルスクヌート王、そして告白王エドワードに仕えた。

⁹⁸ ジワーズは、1033 年には、クヌート大王によってノーザンブリアの南を支配する宮廷貴族に任命された。

は、ウェセック伯ゴッドウィン(Godwin)の3男で、イングランドに就いたハロルド(Harold Godwinson)と兄弟であった。彼は、ノーザンブリアを治めるのに苦心した。彼は、ノーザンブリアの支配的階層(デンマークからの侵攻者と北方からの侵略者の生き残りの混合)に人気がなかった。そのために軍人をノーザンブリアから募ることが難しく、彼は、デンマークやフローレンスからの雇い兵を使った。その支払のために重い税金をノーザンブリアに課した。また、彼は、彼の支配の反抗者には高圧的な姿勢で臨んだ。時には、ノーザンブリアの支配者を殺害することもあった。彼は、エドワードの宮廷を離れ、スコットの侵攻を上手く防ぐことができなかった。1065年には、ノーザンブリアの大臣達は、トジッグの家臣や支持者を襲い、彼らはトジッグを無法者と宣言し、マーシャ伯の兄弟モルカル(Morcar)を呼び、彼をノーザンブリアの宮廷貴族に立てて、南に進み、ノーザンプトンでエドゥイン伯と合流し、エドワード王によって使わされたハロルド伯に会い、トジッグを訴えた。ハロルド伯は、エドワード王を説得し、トジッグをスコットランドに追放した。スコットランド王マルコム3世(Malcolm III)(在位1057年-1093年)は、トジッグに避難場を与えたが、1066年のスタンフォードの戦い(Battle of Stamford)には参加しなかった。トジッグは、デンマーク王国の王アラルド3世(Harald III)⁹⁹(在位1074年-1080年)と接触し、イングランドを侵攻するように説得した。1066年9月20日にアラルド3世は、トジッグと共に、タイン川(River Tyne)の河口に上陸し、マーシャ伯のエドゥインとノーザンブリア伯のモルカル(Morcar)をフルフォードの戦い(Battle of Fulford)で敗北させ、ヨークを侵攻し、包囲し、人質を求めた。彼らは、スタンフォード橋に食糧を集めることを地元の住民と約束した。ノルマンディーからの侵攻に対応していたハロルド王は、ロンドンからイングランド軍と共に北に馬を走らせ、彼らの前に姿を見せた。このとき、不意を突かれたアラルド3世とトジッグは、戦いの準備をせずに、食糧の到着を待っていた。そこにアラルド王が現れた。ハロルド王に降伏を迫られたアラルドがそれを拒否したので、ハロルド王は、その9月25日にアラルド3世およびトジッグと戦い(スタンフォードの戦い)、圧倒的に勝利した。

モルカル(Morcar)(在位1065年-1066年)がトジッグの後を継いだ。1066年のフルフォードの戦いで、モルカルとエドゥインは、トジッグに敗北した。ハスティングスの戦い(Battle of Hastings)でハロルド王がノルマンディーのウィリアム(後のイングランド征服王ウィリアム1世(在位1066年-1087年))に敗れると、モルカルとエドゥインは、王位継承を宣言していたエドガー・アシリング(Edgar the Ætheling)¹⁰⁰(1051年生?-1126年没?)を支持し

⁹⁹ 彼は、デンマーク王 Sweyn II Estridsson の息子(非嫡子)であった。彼は、デンマーク王としての治績では、デンマークの硬貨の改善と標準化に努めた。Ribe, Viborg, Lund および Schleswig に鑄造所を建てた。

¹⁰⁰ 彼は、エドモンド2世(Edward Ironside)の孫であった。彼の父は、Edward the Exile(逃亡者エドワー

た。しかし、ノルマンディー軍に対応する軍を集めることができずに、彼はウィリアム征服王に従属した。ノーザンブリアの宮廷貴族(伯)は、コプジー(Copsi)(在位1067年)に代えられた。彼らは、ウィリアムに反抗したが、捕らえられ、1071年にエドウィンは殺害され、モルカルは、他の反乱軍に加わったが、捕らえられ、ウィリアムの死後に、監獄で死亡した。コプジーは、ウィリアム(征服王)がハステイングの戦いで勝利すると、1067年にBarkingでウィリアムに臣従し、その代償としてノーザンブリア伯をウィリアムから与えられた。彼の治世は5週間続いたが、その時点で彼は、1065年にモルカルによってバンバルグの高官(王宮貴族)に任命されたオズルフ(OsulfあるいはOswulf)¹⁰¹によって殺害された¹⁰²。ノーザンブリアの北を治めていたオズルフの土地が、ウィリアムによってモルカルが廃止され、ノーザンブリアの王宮貴族にコプジーが任命され、コプジーに奪われた。彼の後継者オズルフ2世(Osulf II)(在位1067年)は、1067年の秋に無法者(山賊)を捕らえたが、その男の槍に突き刺され、死亡した。

彼の後継者は、コスパトリック(Cospatric(あるいはGospatric))(在位1067年-1068年および1069年-1072年)であった。彼は、ウィリアム征服王からノーザンブリア(あるいはベルニシア)を多額の金額で買収した。1068年の一連のイングランド北部の反乱に彼は加わった。この反乱は、直ぐに、ウィリアムによって押さえられ、そして北部の土地はノルマンの新参者¹⁰³に与えられた。コスパトリックはスコットランドに逃亡した。また、1069年に彼は、エドガーの下でイングランド、スコットおよびデーンの軍に加わり、反乱軍は敗北した。バンバルグを所有していたのでウィリアムとの交渉で、彼は、1072年までその地位を保った。その後、スコットランドに逃亡し、マルコム3世にダンバーの土地を与えられ、後のダンバー伯に当たる王宮貴族になった。ウィリアムは、コスパトリックを追い出し、ウォルテオフ(Waltheof)(在位1072年-1075年)をノーザンブリア伯に任命した。彼は、1075年の王宮貴族によるウィリアム王に対する反乱に加わったが、捕らえられ死刑にされた。彼は、ウィリアムに処刑さ

ド)(1016年生-1057年没)の子で、エドワード2世の死後、ハンガリーにエドワードとエドモンドとともに逃亡した。告白王エドワードは1057年にハンガリーから逃亡者エドワードを呼び戻したが、しかし、彼は、イングランドに着くと直ぐに死亡した。このとき、エドガーは6歳であった。1066年に告白王エドワードが死亡したとき、エドガーは15あるいは16歳であった。彼には王位を継承する軍事力がなかったので、ウェセックス伯ゴッドウィン息子のハロルドが王位を継承した。

¹⁰¹ 彼は、バンバルグの宮廷貴族(High-Reeves)のエズルフ3世(1041年没)の息子であった。また、ノーザンブリアの宮廷貴族(伯)ウトレズ(1016年没)の孫であった。

¹⁰² コプジーは、ノーザンブリア人には侵略者、すなわち、征服者ウィリアムの徴税請負人とみなされた。よって、コプジーはノーザンブリアでは人気がなく、オズルフが軍を召集するのは容易かった。オズルフは、Newburn-upon-Tyneで戦い、教会に逃げたコプジーを焼きだし、その首を刎ねた。

¹⁰³ Robert de Comnines(在位1068年-1069年)であった。彼は、フランドルの貴族で、征服王ウィリアムとともにイングランドに着た。彼はダラムで反乱軍に焼き討ちに会い、焼死した。

れた唯一のアングロ・サクソン貴族であった。

むすびにかえて

本稿では、5世紀から11世後半までのノーザンブリア王国(スコットランド王国の周辺国)の変遷を概観した。ノーザンブリア王国の最盛期(絶頂期)は、7世紀であり、エドウィン王、オズワルド王、オズウィ王、エクフリス王およびアルズフリス王に及ぶ90年間であった。この王国の基礎を築いたのはアシルフリス王であり、彼は、その当時の周辺国であったダル・リアダ王国、ピクト王国ならびにマーシャ王国を押さえ、ベルニシア王国とデイラ王国を統合させた。しかし、8世紀になると隣国マーシャ王国の威力が盛んになり、ノーザンブリア王国はマーシャ王国の王に屈服させられるようになった。ノーザンブリアの勢力が衰えると、マーシャ王国はアシルバッド王およびオファ王の時に全盛を迎えた。しかし、マーシャ王国は、ハンバー川の南のイングランドを統一し、ノーザンブリア王国と力の拮抗状態を保ったが、9世紀の半ば過ぎには、ヴァイキングの侵攻に、ノーザンブリアならびにマーシャ王国やウェセックス王国などイングランド全体が悩まされた。ノーザンブリア王国は、ヴァイキングにその領土を奪われ、マーシャ王国もその東アングリア王国をヴァイキングに奪われたが、ウェセックス王国とアルバ王国は、ヴァイキングに上手く対応して力を伸ばした。

ウェセックス王国は、マーシャ王国から南イングランドの覇権を奪い、またアルフレッド大王によってヴァイキングの勢力との戦いで打ち勝ち、ウェセック王がイングランドの大君主になり、アシルスタン王のとき(937年)にイングランドを統合した。アシルスタン王はヨーク王にもなり、ヴァイキングを押さえ、ノーザンブリア王(ヨーク王)になったが、彼の死後、イングランド王国はヴァイキングの侵攻と戦い続けた。しかし、11世紀の初めにはデンマーク王の Sweyn およびその子のクヌートに攻められ、1016年にはイングランド国王自体がヴァイキングのクヌート大王に支配された。ヴァイキングは30年弱イングランド王に君臨したが、1066年にはノルマンディーのウィリアム(征服王)に征服された。このノルマンディーからの侵略者の先祖は、ヴァイキングであった。

アルバ王国も10世紀の初めからその終わりにはかけて、スコットランドを統合して行ったと思われる。このアルバ王国のスコットランド統一については別の稿で行う。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著(大塚 久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
スマウト, T. C. (木村 正俊 監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
アダム・スミス 著(大内 兵衛・松川 七郎 共訳)『諸国民の富』(四) 岩波文庫 1992年4月

ジェフ・デランティ 著 (山之内 靖・伊藤 茂 共訳) 『コミュニティ』 NNT 出版 2007年4月

David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年

ジョン・ロック 著 (鶴飼 信成 訳) 『市民政府論』 岩波文庫 1971年1月

ジョン・ロック 著 (加藤 節 訳) 『統治二論』 岩波文庫 2010年12月

(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)